9913
355
No17195/22

復讐管蓑譚

大東樓愚樂人著

第一齣

今を距る三十年餘りの往昔孝明天皇の御宇年号を安政と申せし五年の春彌生の辭なかりし美濃國安八郡大垣の城下の町外れに黒燒板塀にて周圍の疆界せし別莊二戸並隣す其一戸は仝國池田郡和田村の鄕士阪本氏の未亡人信江が隱居所なり今日しも信江は程遠からぬ梵刹に法莚のありとて下婢一人を伴て行たる留守には二女菊枝と稱へる本年十七歳に成れる愛孃と下婢むめ下僕權三と三人なり菊枝は椽鼻に在りて當時を盛りと爛熳なる庭花の糸櫻を眺めて餘念無き折柄一聲籟すさむ横笛は春鶯囀の秘曲を奏づるなれば菊枝は耳を欹て聞澄し居けるが今此曲を吹奏づる隣家と當家との隔の板塀に豫て設けし切扉あるを昨日か一昨日の事なりけん厠に尿屎汲む農民の鎖忘れしか鑰のなさぞありしがチラ〳〵と花を散す嵐の爲め齊藤が邸の方へ開たり是が爲に笛の音を止めて僕を喚ぶ聲の聞ゆるは鎖しめんとてなるべし菊枝も驚きて

菊「コレ梅や……梅は居無いかアノー一寸切扉を……
と云ふ聲に走り來たる下婢のお梅椽先へ手を突て
梅「ハイ召ましたか御用は何でございます
菊「お隣の隔の切扉が風で開たから鎖てもらうと思つて
梅「權三が又忘れましたのでせう……人も六十越し舛と老耄していけませんねー
と云いつゝ駒下駄を穿て飛石傳ひに鎖んとする物音に見るとは無しに椽側に出て當方を見るは隣邸に前刻から笛額居りし人なるべし手に一管の横笛を持し一個の少年齡は廿年に二年三年足らじと見ゆる前髮姿聊か着古せしか稍未剋色なる黒二羽重の綿入に淺着衿せし肌着なして博多角帯を固く締たれど心地例ならぬか額髮の二條三條頬の邊に振り掛りたるは優にしていと嬌なり田舍源氏の光氏は種彦と豐國が意匠より幼出せしものにて世に有るべうもあらざれば比譬には取り難けれど彼の業平の少年盛りも恁やと思ふ許なり切扉を鎖んと立寄し下婢のお梅も年まさに十七歳衣裝こそ美服を身に纒はね天の爲せる麗質なれば彼の少年も思はず見恍手に持つ笛を椽の上にカラ

りと落せるにお梅もハッと見惚て思はず遂巡る菊枝は何事ぞと床脇の圓窓の小障子押開きて彼方を見れば思ひきや去年の二月に谷汲の觀世音の開帳の雜沓中に振袖が帯刀の柄にまつわりしを執らんとせし際不意く顔見合せし其后の目に遮りて忘れ得ぬ意中の郎にありければ思わずクワッと赧面を彼の少年も認めしか是も仝じく赤らむ顔お梅は強て氣を留ぬか意無くも切扉を鎖たり

抑今阪本氏の別莊の隣の寮に在て横笛を吹弄居たる少年を何者ぞと問ふに之ぞ是當篇中の主人公にて以前は紀州家の藩中にて相應の祿を領し齋藤宮内と稱せし武士の長男左司馬にて實母つるは宮内が四十歳の春當年六歳なる一子左司馬を遺し傷寒の爲に三十六歳を一期として鬼籍に入りたるより或人の勸奨に默止難く翌年の事なるが松江藩の京都邸留主居岩城庄太夫なる者の妾腹の女子きみと稱する婦人を迎へて後妻とはなしたり該きみなる者は當年十八歳なれば四十歳を超し宮内とは相應しからぬ夫婦にして殊にきみの母は京都島原の花魁花衣と稱ひて曳人數多の全盛の果なれば生母の遺傳なるか行く水の浮たる質なれば頭に霜の置初たる良人を嫌しとは思へど父の命なれ

が止を得ず娶られて面白からぬ閨の月を眺め消光しけるが玆に不時の災厄起りたり齋藤の家の代々君家に仕ふる鎗劍の術の事よりして國老某氏と激論せしが遂に家祿を召上られ浮浪の身とはなりたり然れども齊藤の家は儉約質素を以て家則としたれば父祖三世の中に貯蓄の金も乏しからねば豈五斗俵の爲に腰を屈せんやと母方の親族の在るに便りて五箇年以前安政元年の冬當大垣に寄寓して本町四丁目に町道場を開設なし鎗術劍道の師範をぞ初めけるが當城主戸田家の藩士は勿論近國近在の士民も追次入門して今は江州濃州に肩を並ぶる者無き鎗劍の師範家とぞ仰がれる迄になりぬ妻きみと宮内との交情も何時の程にか密かとなりて夫に二無く仕へけれど繼子を憎むる一般の常則にて左司馬の中は宜しからず殊に左司馬は武藝を忌み嫌ひ學問其他和歌俳諧管絃の道に心を委ねければ本町の宅にあるは稀にして多くは此別莊に在り加之去年谷汲に無名氏の一婦人に眷戀してより心思鬱悒の病痾を發したり偖てぞ此別莊に在りけるなり

第二齣

黃雲城邊烏欲棲。歸飛啞々枝上啼。機中織錦秦川女。碧紗如煙隔窓語。停梭悵然憶遠人。獨宿空房涙如雨。と近來長崎より傳習して大阪に流行せる平井連山が授けたる月琴にて彈鳴す烏夜啼の一曲を一齣終りて

アー憶遠人と遠い處に居る人を憶ひ慕ふのなら絕念て寐られもしやうが僅に板塀一重に隔て居ながら然も今晩はおッ母さんにお勸奬申して夜講の御法話を聽聞にお出し申して待つて居る甲斐が無い尙お出にならないのは例の左司馬さんのおッ母さんがお越になつて居るのであらう……他人か噂をして居るのでは何でもアノおッ母さんが左司馬さんを捉まつて戀慕らしい事をお云ひなさるさうなツイ此頃迄繼子憎みなすつたが止だと思つたら……今夜も又例のが始つて居るので有う何を云つても左司馬さんとは十餘年しかお違ひなさらないのに夫におッ母さんも匆々お美くしく入らつしやるのだから五年六年もお差違なさらぬかと思ふ程だで万一も誤しな交情におなりなさらないかと配慮てならない……前月の恰是今日だつた不圖板塀が風で自然に開て谷汲己來でお顏を見たのは……其后お梅が種々と消

尾して信書を屆けてくれておッ母さんのお不在の節を待儲けて嬉しふ逢ふのも今夜で五回……アーア板塀が風で開なかつたら妾は當地へ來て間が無いからお隣に左司馬さんがお在なさらう抔とは夢にも知らないから今の此苦勞はせないであらう……

と獨言は彼の阪本の二女菊枝なるが天性稀世の佳人なるに今宵は情郎に逢ふべき夜と粧ひ籠し紅白粉遠山の眉は翠を添へ芙蓉の眦は彌よ麗しく丹花の脣は益ます色増り素肌の綿衣の寢着に緋の縮緬のしごき帶せし姿はいとゞ嬋妍にして婀娜なり折柄例の切扉を徐ろに排開きて入來るは左司馬なり朧月夜と散殘る遲櫻の花の明りとに菊枝の相思ふ左司馬の姿は全人の眼より見れば言語にも盡されぞと編者は推測を下せば形容を贅せぞ左司馬は駒屐の音を忍みて庭石の間の苔を歩行て椽端に來れば菊枝は手を執り引廻しある金屏の裡に左司馬を誘引入りたり閨中の私語は如何なる言葉なりしが屛風は深く鎖せり聲音は至つて微なり枕其品にあらざるよりは聽くに術無し只看客の認定に任ぞ可し

農商の子弟は晝間業務あればとて齋藤宮内は夜稽古を開きしより益す門人の數を増し亥の刻頃迄はヤット——まいつたお面お小手の聲に絶間無きは彼の大垣本町四丁目の鎗術劍道指南の道場なり今宵も漸く子の刻前宮内は教授を爲し果て稽古場より居室に皈れば妻お君は薄暮頃より氣に入の下婢一人召伴れ何處へか遊歩に行つて今暫前に皈つて來たが其樣な顏もせぞ

君 嘸お疲勞でございましたらう此頃は追次にお門弟が殖ますのでツイ〳〵夜が更てお困りでせう……

と云へば宮内は座蒲團の上に座して煙草を吸ながら

宮 お國許に居る時分の樣に卯の刻から藩中の若輩の稽古が詰懸て來る夫をしまつて己の刻前から登城する事を思つて見ると勸仕と云ふ事をしないから氣を遣わ無いダカラ疲勞を覺へ無い……疲勞と云へば今夜左司馬を尋ねてやつたか病氣は如何なつた……

君 宵に一寸行つて參りましたが……妾は奇態なものを拾つて參りましたでチト卿ハ

極密々な話しを申上ませうと最前から御稽古の果ますのを御待申して居ましたので……妾と左司馬とは不分娩ですから此樣な事を申すのも異なものでございますが左司馬の病氣は虚でございますぜ……アーして別荘へお置になつては後爲になりますまいと妾は存じます……と許ではお了解がありますまい只今拾つて參つた品を御覧に入れますで……

と帶の間より何品か取出し宮内の膝の前へ置たり宮内は不審想に手に取見れば婦人の手跡の信書の引裂て破り丸めたるなれば押撫げ繼合して口の中にて讀み終りてムーンと云つた限で暫時無言

君 サー恁云ふ仔細ですから卿にも一御分別なさいませんと先方も大事の秘藏處女万一他家へ嫁入の相談でも整つて有つて御覧大變でございます尤も聞けば兄子も姉子も有つて何の道何處かへ緣付なさるのでせうから逢つたり叶つたりで當方も貰わねばならないのは云わないで知れた事ですで恰是公然云ひ入れて……とても思召て入つしやいませうが……夫にならば其時の事親と親が許さないのに人目を忍んで逢つて居ては不義姪犯でございませう御浪人はなさつても多人數の御門人が」あつて人の師範教授を遊ばす當家の息子とも有う者が如彼では濟ますまい卿はお許しなさつても世間の人が免さ無いでせうですから妾が存じますには御門人の中で見適これならばと思召す人にお預けなさいまして然うして如何に生質柔弱いたつて武術の家に產れた男子ぢやございませんか迂遠い學問では到底も一家の活計が立ないのは知れた事ですから矢張鎗劍の稽口を勉強して卿の跡名相續が出來無いでは齋藤の御先祖へも濟ますまい……とサー卿からお呵責なさいましたら元來怜悧なアノ左司馬ですから決めて心を入れ換て武藝の稽古を致す様になりませう其上でアノ孃を貰つて娶にしたら宜しからうと存じます前刻も夫ぞ無く左司馬に其事は云つて置ましたが……

宮内は此際迄手を拱居たりしが

宮 ムー成程……

第三齣

翌の稽古の濟たる頃を考へて本町四丁目の齋藤宮内の宅へ來りしは仝人の一子左司馬なり宮内は居間に居れど內弟子其他の門人は尚稽古塲にありて竹刀の音は嘩すし左司馬は吾家なれば斟酌なくズーと父宮内の居間に通ると何時に無い不興氣にてオ！左司馬病氣は如何だとも云わぞ苦い顏して默止つて居るからハーテ變だとは思ひながら骨肉分配し親子の事なれば然しも心に留ぞ

左　お父ッアン今日は……

と云つても無言なれば手を突て左司馬も無言方今の時計なれば短針の三つも順轉る程沓眼合つて居たが左司馬はエー儘よ云つてしまうと心を決して

左　僕は少々お願いがござりますので今日は別莊から參りました……他の事ではござりませんが僕も兎角病症だと申して恁して居りましては益す柔弱になりまして到底物の用に立つ人間にはなりますまいと不圖心付ましたから已來は勤めて鎗劍の二道を勉強して天下に名を顯わすと迄は參りませぞとも切て貴父の跡を繼ます迄になりたいと存じますで……

と云へば宮内はこの時初めて面を和げ

宮　ムー爾云ふ心が付たか……汝は幼年の頃から柔弱で武術抔を嫌ひ學問だの其他風流に志しを寄せて居るから天性を曲た事をさせても不可と捨置たが愈よ以て其氣になつたは悅ばしい譯だダが惜しい事には三四年遲延い當家唯授一人と云ふべき家傳の鎗劍の奧儀は吾鑑定を以て讓るべきものと粗決した者が二人あつたが內一人は幼少の砌から召使つて居た若黨の木下多市た處が若輩の者は實に詮術の無いもので目下の細君が京都から召伴て參つた下婢のてると稱つた婦人と密通したで餘儀無く兩人とも暇を遣したが其後は何處へ行つたか便宜が無い又今一人は目下師範代もさせてある松島四郎だ這奴は以前將軍家の旗下の家に生れた二男だが嘉永四年とか五年とか十八歲の時だつたさうなが色情の事から爭論を起して朋友に負傷をさせてから浪人をしたと云ふ噂だが何にしろ身の丈四尺有餘の大の男で筋骨逞しく適れの壯士で鎗劍兩つながら妙を得た上に當流の極秘とする處も粗自得して居る樣だで吾家の名跡は彼に讓らうとは決心して居るが愈よ以て汝が鎗劍の

二道を以て身を立つるの存心なら松島に付て稽古をするが好い吾は汝には稽古をせない何故なれば汝は柔弱だから後來の目的が無い夫で稽古はさせ無いと門人にも豫て云つて居るのだから……

と父が慈愛の教訓に左司馬は恐縮て思わず額を疊に付て居ると次の間から

先生……御免……

と聲を懸て這入つて來たは二十六七歳の男之れ松島四郎なり

松 委細の事は次の間で承はりましたが左司馬君か武術を勉強して御當家の名義を相續しやうと云ふ氣におなりなすつたは實に賀すべき祝すべき事で自前にも悦ばしう思ひますが先生には何かお差閊の件もあつて御稽古がなされ難い事ですなら今日から假に僕と師弟の約を結び私宅へ引取つて晝夜指南するとしませう左司馬君だつて稽古なさらないから柔弱なので晝夜精を出して稽古をなすつたら必す強壯になります爾したら元來が怜悧だから忽ち上達なさるでせう……

宮 拙者の口から申憎いでお依賴も致し兼たが爾貴公が申されるなら今日より貴公のお宅へお同伴下さつて然る可く……其御禮と申すでも無いが江戸町の貴公の宅を道場にして齋藤出張所の名目を以て以來貴公が門人をお取りなさい左司馬が御厄介になる之れが……

松 アーイヤ先生未熟の僕がどうして夫を……

宮 ナーニ謙遜も物によるから……

松 ぢやーお請します……

此問答を次の室に居て聽居たる宮内の後妻お君は都合よく行つた……と口の中で云つて莞爾

當日左司馬を仝伴して四郎は私宅に皈りたれば別莊も當分は留守番の老爺のみなれば左司馬が爲に取出せし調度類を土藏に納めんと午后よりお君は別莊さして出で行しが例の何れへ遊歩なし居るか夜に入りても皈り來らず然るに彼の別莊の一室には何者とも知らねど男女の聲

女 種々御配慮になりまして漸うと邪魔を拂らいました

男　ヘン邪魔を拂つた……むまく云つてお出なさるねー卿が格外北山時雨だつたと云ふ評判ですぜどうも訝しい屹度どうかなさつたに違いないと誰でも云ひます……

女　アラ厭ですよ現在の……

男　子だつて親だつて芋田樂と云ふ事はマヽある事です爾せないと一家が和熟せぬに決つて居ます既に昨晩も宵からお出なさつて長〳〵僅二人對偶で話しをして入らしつたぢやありませんか……

女　それは今日の一件をむまく瞞着してやつて居たんですよ是からは此別莊で憩して逢つたら誰にも遠慮はありません……卿のお宅でも搆わない樣なものゝ近處へ對して外聞が惡りいでせうと思ひますは此樣な媼が出這入をするぞ……

男　又媼がり病氣が發りましたねー

女　デモ媼ですものを……

男　媼〳〵お云なさるので思ひ出しましたが臺所に居る老爺はよろしいか本宅へ行つて何も云ひはしまいねー……

女　それは安心さ豫て捨扶持がやつてあるから既にアノ証據の信書も彼奴が拾つて置てくれたのですよ

男　其扶持は芋田樂の噂をせない樣にでせう

女　アーレ憎い口だねー

第四齣

齋藤左司馬は松島四郎の附屬となつて晝夜武術を練磨せしが父祖の遺傳なるが故にや至一年になるならざるに上達して四郎も今は一步讓る許になりければ父宮内も是を聞て大きに悅びイデ左司馬が懇望なる阪本の愛孃菊枝を娶りて仝人が妻となさんものと媒介人を依賴して申入れければ早速に縁談整ひて翌安政六年九月をトして婚姻の式を執行する事に决せしが玆に不慮の災厄起りて該事を妨害せり何となれば仝年七月十日の事なりしが齊藤の道場も例として土用中は劍稽古の外は休業にて午后は所在も無く殊に昨日より朝迄雨降りて霽たれば久世川に魚を釣られればよき獲物あらんと松島四郎を誘引て宮内は該堤防に行たり當日申の刻にも垂んとする頃大垣の市中騒々しく喧嘩

〳〵と喋々して人東西に奔走せり既に本町の齊藤の道場の門を右往左往して語るを聞けば

甲 大變な事です子ー相手は達磨の七五郎親分ですから……

乙 アノ人は目下は博奕打にこそなり下つて居ますが以前は紀州田邊の藩中で鳥山隼三郎と稱つて劍術は天羽流の達人です

丙 爾ですとも笑ふ時には小兒も親しみ怒れる時には鬼神も恐ると云つて柔和で義氣が強くつて他人の難を見ると水火の中に入つても救助つてやると云ふ頼もしい俠客だ

丁 一方は岐阜大垣切つての惡黨で八鬼山辰五郎と稱つたら角力取は付たりで賭場の胴取と諸方のアラトリが稼業だ

戊 夫れに辰五郎の子分の中でも五十嵐藤造に小林藤吉と云つたら四天王の中の二人だぜ……

甲 今日の喧嘩に原由に何處かの賭場で彼の二人が傍若無人な事をしやがあるので七

五郎親分が見耐らない底で散々に辱しめたら取つて懸つたからサー勘辨が出來無い達磨の子分が二人の奴輩を打擲つて追返したのが意趣だと云

乙 夫から八鬼山の方では何時ぞはと待ちに待つて居た處が昨日から岐阜に達磨の賭場が開けて今日は七五郎親分が皈るといふ事を八鬼山へ注進した奴があつたと見へて久世川の堤防で待伏して居た處へ七五郎親分は例の通り子分を伴れ無で一人スタ〳〵やつて來たのを出し拔に八鬼山と五十嵐と小林が斫つて懸つたが喧嘩の抑々で

丙 今眞最中で今又八鬼山の子分が二三人も切苧の草鞋に長脇刀で飛出しました

丁 最前見て來た人の話しでは小林は脇腹掛てばらりぞんと切下られて眞二つになつて居ましたと

戊 辰五郎も淺割か深創か知らないが二所三所と疵を受て居ると

甲 達磨の親分位の人でも人間一人殺ろすと血迷ふものと見へて八鬼山の子分が迯て行くを追つ駈て來て間違つたか魚釣に來て居る人が蹤いて迯懸るのを切らうとし

たさうだ

乙 イヤ其人は切られたか

丙 どうだか知らないが其様な太刀魚のお相伴は下さらない

丁 君子は危ふきに近よらすだ

戊 とんだ君子だハヽヽヽヽ

と笑ひながら行過るを門内に聞居る齋藤の内弟子は又一塲の騒擾を惹起し

イ 七五郎は失敬極つたる奴だ無いか

ロ 如何にも爾だ魚を釣つて居る人を當の敵と間違うとは……

ハ イヤ他事で無い久世川堤なら先生がお出になつてある處だ無いか

ニ 成程……万一もの事があつては大變だ駈付てお味方を申さうで無いか

ホ お止なさい／＼猫が稽古塲で夜中に暴行れたを盗賊と取違つて雪隱の中へ逃込むお手際ぢやヤナト……

イ と云つて居られる貴公もカタ／＼顫ひで手燭に灯が點せないのを武者戰ひだと云われたゞないか

ロ 其様なくだら無い事を云つて居る中に準備をしては如何だ

ハ イヤ拙者は留主番をしやう何故となれば門人悉皆行つてしまつた迹へ七五郎が暴行て參つては大變ですから拙者は後ろ備に……

ニ 拙者は生憎下帯を締無いで所謂ふり◎◎だから万一切死をして相果た迹に屍を遺しては齋藤の門人とも有うものが男根を剝出しで死しては先生のお名義にも關係るから……

ホ ぢや恁しやう……甲乙と云わうよりは鬮引にしやう

イ 夫が可い／＼

ロ 五本紙捻を拵らへて三本は結んで結ば無いのが二人留守番下帯のない人に當たつたら留主番の下帯を御融通申すとして

ハ 可宜

皆 諾々

ホ 承知〳〵

と茲に衆議一決して二人は殘り三人は股立玉襷後鉢卷と行粧整頓出でんとする處へ入り來る壹個の門人

ヤー各君は何處へ……

イ コレハ高木君……拙者等は久世川堤へ……

ロ 駈付て參つて喧嘩の實地も一見して

ハ 且は先生の御安否をも……

ニ 伺ひの爲三人は出張

ホ 二人は後備の留主預かり

高 お止なさい〳〵諠嘩は疾に結局なりて七五郎は五人の人を切斃して傍の石に腰を打掛け既に切腹しやうとして叉何を思つたか腰の箭立を取出して懐紙へ何か書付て死骸の側へ竹に挾んで建置て白刃を口に啣へて久世川の逆卷く水へ跳り入つて何處へか行つてしまいました……今時分は十町も川上か川下への這上つて小便でもして居るでせう……

と語る處へ遽だしく息喘切つて馳戻つたは松島四郎なり玄關より高聲に

松 御門弟衆〳〵……何誰か一人私宅へ急ひでお越し下され左司馬殿を御仝伴下さい奥方は何處へお出だ一大事でござるぞお早く〳〵

第五齣

松島四郎は齋藤の一家内を始とし門弟子を喚集め手拭にて卷立て結ひし太股の負傷を衆に示し

松 拙者本日先生の御誘引に預り久世川の堤で釣を垂れて居つたが兩人立んで居るのも如何と半町許りも隔つて居ると幽微に丁々と劍の打合つて居る音がするので振返つて見ると先生は何奴かと戰つてお出なさるから……早速駈付る間に曲者は何の苦も無く先生を切倒して止息を刺す處だつたで己れと拔打に切つて懸れば這奴も手練者拙者の大股に切付たで思わずタヂ〳〵と一足二足退る間に久世川の水中に飛込でしまつたが其際に面を見たら豫て認へのある達摩の七五郎だから直ちに

跡を追駈うかと思つたが此一大事を知らせ申さうと取るものも取敢す歸つて參つた……

と或は憤り或は悲み述ければ左司馬が驚きは容易ならず君も仝じく驚いて歎き悲むを忘れしが如く長刀小腋に掻込で久世川を指て駈出んとなしければ皆々は押靜め逆上せては惡かるべしと藥湯杯を服用さしめ打臥させ置て死骸引取に着手せんと左司馬を諫め慰めつ四郎は久世川堤に出行ける該一珍事は早くも城内へ聞へ領主戸田家よりは撿使として脇谷進之丞實地現場に出張しければ左司馬君を始め四郎其他門弟共は何れも悲歎にくれ居たり撿使脇谷は死骸を逐一に點撿し

「只今拙者撿分として出張致したが此死骸の傍に竹へ挾み建ある一通の書面は達摩七五郎事本名鳥山隼三郎が自筆の手跡に紛れないが……我等に意恨ある趣きを以て彼輩より手對ひ候に付據ころ無く五人の者を討果し立退き申候間死骸取片付け方の儀宜しく願上候已上……村御役人樣御中……とあるからは仝人が切害せしには相違無いが聊か拙者が不審とするは齋藤宮内とも云われる劍道の達人が後ろ疵……是一、又た松島四郎が申立には仝人が半丁許遠方より刃傷に及ぶを見懸け駈寄つた折柄止息を指して逃去つたとあるが自筆の概意書のあるが……是二、又他は博徒の八鬼山の子分だのに辰五郎の死骸が見へぬ見物なし居た[illegible]翌の申立には辰五郎は既に數ケ處の重傷を負つて居りしと然るに逃去りたるか姿を見せざる……是三、仝じく見物人の申立には齋藤宮内は該闘爭の場に居らぬ且平常惡黨なりとて爪彈きなして交際をなさゞる辰五郎の應援をなせしか同樣に切害せられ居る……是四、假は松島四郎が申立し如く仝人が來るを見て一時の鋭氣を避んと水中に飛入り再び浮び出て趣意書を記して建置しと見るも近邊に人家無き磧にて水に濡ざる筆紙を需るの術無し……是五、斯の如く五箇條の不審はあれど何分本人自白の書面を以て証憑充分なれば他に敵を索るの道無しと思慮するで死骸は引取られ葬式あつて然る可しと存せらる……然し愁傷は察し入ると……

是にて撿視も相濟ければ死骸は私宅へ引取りて懇懃に葬式をぞ營みける……德川氏天下の政權を掌握して三百年人民治世に馴れ尚武の道は地に墮しが近來米國の軍艦浦賀

に渡來せしより世上何と無く穏かならぬ殺氣は吾日本の空に立臨り稍血腥き江湖とはなりてあれば彼の齋藤の一家も倶不戴天の仇敵たる達摩の七五郎をやわか此儘見遁し置べき草を分つても捜索なして討取宮内の未期の一念を安からしめざれば假にも兩刀を手挾むの甲斐やあると左司馬は素より門弟の騒ぎ出せしかば多人數悉る企てをなさんも不穏當の處置なればと左司馬壹人復讐の爲に出發する事に決し本町四丁目の本宅は未亡人きみが留主をなし稽古場は松島四郎が預りて門弟の指南なす事と衆議を遂て仝年九月三日を卜し啓行と事定まりぬ然るに齋藤家に僕たる伊之助と稱へる男ありて年齢二十二三歳なるが今般左司馬が復讐の一擧に是非同伴致したしとの志願なれば是亦同人が誠忠の義氣に免じ同行する事に決したり」匹馬關山秋色裏胡笳吹斷萬峯雲と明の宗臣が王元美が江南に使するを送りて吟せし詩の句とは稍趣きを異にすれど何處を目的に白雲の棚引く峯を踏分て敵を搜し索得て何時か故郷へ歸らんと思へば樹々の梢の色も愁を添ふる種子となり袖に結べる露霜も涙の玉と疑われ勇む心も何やらうら悲しさに佇立るは左司馬伊之助の兩人なり松島四郎を始めとして門弟輩城下外れ迄見送り來り倘何處迄と云ふを左司馬は謝し

左 各方にもモー是でお歸り下さい實に訣別に果しがありませんから

松 夫ぢや御門弟衆際限がござらぬから左司馬君の御意に隨つて引取ると致さう……隨分道中御一身を御自愛なさつて御壯健に……一日も早く吉左右をお聞せ下さい……お留主宅は及ばぬながら御母堂の御介抱御門人の指南等は身不肖なれども拙者四郎が擔任致す上は決して御配慮は御無用です

左 七五郎は尾州表に親族がございますと仄に傳承致しましたから差向同地方へ參る目算……何時皈るやら判然兼る旅行ですから何分留主宅の儀を……

松 其儀は御懸念なさらぬかよろしい然し万一旅費欠乏の節は伊之助殿をお寄越しなさい何時でも……デハ左司馬君……伊之助殿御苦勞……

左 松島君……御免……

第六齣

大坂道頓堀は悲喜哀樂混淆し穢と無常と踵を接する奇地にして前には妓樓演劇甍を列

し後には墳墓石塔纍々とせり朝にいきぬ〳〵の別れを喞ちて駕に乗る妓あれば夕には明日の薪は此身なるらんと嘆きて棺を送る人あり梵唄の聲は絲竹の音と調和し渤潑りながら唱ふる念佛は鼠啼と合併す夫等は尚しもの事にして就中怪々と稱すべきは梟首眠つて高き架の下に經妓娼婦の相徃來する抔なるべし是すら小夜の事にして更ては通る人も稀なり頃しも神無月の中旬時雨に暗き上弦月足下さへも慥ならぬ千日の荼毘所の墓原をウロ〳〵呻吟ふ一人の婦人夜目にて年齡の判然ならねど尚うら若き二八許笈摺姿の順禮行裝笠にて雨を凌ぎながら

今日は法善寺の金毘羅様の御縁日だから万に一つも左司馬さんにお目に懸らないにも限らないと斯云ふ哀れな風俗をして白晝の中から群集の人に合力を頼んで目を付て居ても類似の人にさへ邂逅無いとは……アー思へば〳〵妾程憫然なものはあるまい思ひ思つた左司馬さんと公然の夫婦になれる事になつてヤレ嬉しやと思つて居る折柄のアノ齋藤の家の騒動左司馬さんは敵討にと何處へか行ておしまいなされたで妾も郷士の家の處女殊に祝言の盃こそせないが親と親との許可を得た夫婦達磨の七五郎は舅の敵共に讐討のお供と思つては見たが枕を交したは夢にも御存知の無い母様へ此様な事を願つてもお聞入はあるまいと一通の書置を遺して家を出てから到底も尋常の姿をして居ては婦人の身での一人旅は危險と髮を亂して衣服を破り取留も無い言を喋言て狂女となつて京都迄は恙無く出て來たので夫から變へた西國順禮當地は多分捜し歩行てもどうも知れないので……此の大阪へ出て來てからでも七八日今晩も木賃の安泊りへと思つて聞て見たら名古町とか云ふ處へ行つたら好と敎へて貰つてツイ一町か二町許り來たと思つたら此樣な墓所

コリヤ狐か狸にでも魅されたのでは無いか知らぬ……

と獨語く其處へ出て來る二人同伴の男

墓所の中を筋違に抜けて榎木祠の前を名古町へ出ると格別近いが二人だから通るものゝ一人の際は難波蔵の北の方の毘沙門様の華表を抜て行ぬと此途次は何だか妖怪でも出やしないかと思ふ氣がして氣味が惡りいはナー姫さん……

馬鹿な事を云つてるぜ妖怪が恐しいと……妖怪が汝を恐かつて居らア堺の徳松

と云つたら住吉街道を徘徊する蜘でも名を聞たら怖なかつて逃てしまうわ

徳 ダッテー八間なら如何な奴が來てもビリッともしやしないが怪は怖ないわねー二三年前に難波から夜の子刻過と覺しき時分で恰是恁云ふ時雨空だつたが松の尾の横手へ來ると十七八位の幻妻か背向に立て居ると思ひなさい爾すると闇の晩だのに島田に掛てある緋鹿の子があり〳〵と見ゆる夫許ならよいか首筋の襟足がキッパリ見へて白粉か三本足にしてあるが如何にも顔は別嬪らしいから前へ廻つて如何云ふ御面像だと見やうとするとサア變だ顔が無くて首筋の三本足だ這奴何時の間に振向さらしたと前へ廻つても矢張り首筋の三本足だ處で身柱元がゾッとしてキヤッと思はぬ聲を揚たら見てる中に三本足がタラ〳〵と溝の邨へ流れ込でクル〳〵と坊主となつたと思ひなさい爾すると今度は身の長か一丈もあらうとする高入道のノッペラ坊だつたのには驚いたダカラ己等ハ妖怪は大嫌ひだ你抔も河内龜だ誰だと思つてるツガモ無へと云つた樣な事云つてるがノッペラ坊に出會して見なせへチッとヽヤッとヽ氣味がよくも無へせ

と云ひつゝ來懸つて先刻から佇立で獨言を云つて居る婦人を見て堺徳はキャッと云つて飛退けば佇立で居る婦人も初めて人の來たのを知つたと見へて之れも全じくキャッと云つて二三足後退つたが薄雲が懸つて仄暗い月の明りに透し見て

女 少し物を考へて居りまして卿樣方がお出になるの知りませいで夫で吃驚り致しましたで思わぬ聲を揚ました大きに麁想致しましたがどうぞ御了簡なさつて下さいまし……

と云ふ顔を河内龜はキッと視て

龜 汝は何者だ順禮で無へか

女 ハイ旅の順禮でございますが宿のある處を敎へてお貰ひ申したのにどう取違へましたか如斯墓原へ參りましたので困つて居りまするが……

徳 宿を尋ねるのか恁見た處が風俗は見苦しいが容貌と云ひ褄はづれと云ひ平常の乞食でもありそむ無い何れ何か仔細があるだらうナー……リ分レコも澤山ドメて居やう假令レコをドメ無いとした處が何所へバラシても百のモノシロはあるせ

隠 ムー贅な語を吐くな……判つて居らアナー姉さん如何に土地か不案内だつて爰は千日の墓所底は名古町と云つて悪黨の巣窟だウヮ〳〵して居て爾云ふ奴の手に掛つたら如何様苛酷い目に逢わされるか知れやしない畢竟已聟の様な當名古町近所で太皷鉦で捜しても他に無い佛の龜と菩薩の徳と渾名を博つた二人に邂逅つたが僥倖だ你さへ頓着しないなら已聟の處へ來て宿泊るかよいナー徳爾だないか

女 ハイ有難うどうぞ宜しう……

隠 兄分に委せて置たら悪くはせないから……

折しも子刻の鐘ボン〳〵

第七齣

堪忍金函辛抱が金だよ……と唱る雲助徃けば坂は照る〳〵鈴鹿は曇ると唄ふ道者來る東海道五十三驛の賑ひ殊更爰は土山驛にて脇本陣をも勤め居る旅人宿大黒屋長兵衛が二階の小座敷に脚氣の脳みに歩行もならず十日餘りも滯留為す主從二人の客は彼の齋藤左司馬と僕の伊之助なり頃しも十月の中旬然らぬだに間の土山雨が降ると音頭の文句に云へる濕地なるに空定め無き時雨日和に病痾の臥床の鬱とし〳〵一夜泊りの旅の客は皆出發ていとゞ閑寂しき巳剋强左司馬は褥の上に起直りて友無き儘の獨語

アー尾州の知多郡には七五郎の弟とかゞ居ると云ふ噂を聞て行つて見たら二三年前に死んでしまつて家の無いので這奴も博奕が稼業だから大阪には賭場も數多い事ださうで必らず大阪だらうと方向を轉じて京都大阪へ行つて見やうと出て來た處か鈴鹿峠を越す際に足がガクリとしたが發病で其晩から脚氣になつて歩行れ無いは素よりの事でどうも衝心の萌があるで滯留したらツイ〳〵今日で十二三日早く全快じたいものだ……ムー伊之助は大層戻りが遅い僅二町許しか無いが醫者の宅だのに何時でも直に皈るのに恁云ふ宿のお醫者だから藥取が輻湊へて居ると云ふ事もあるまいモー行つてから一時餘りにもなるのに……ヤー伊之助の行李が見へ無い……どうしたらう……

と手を拍して下婢を喚び伊之助の事を尋ね問へば病氣の事を知らさんと大垣へ皈る趣きを云ひ置て出立せしとの答へに左司馬は駭き蒲團の下なる胴卷の打換を調査るに裡

なる金子は何時の間にか釘の折と變じ假なる胴亂の中に出し置たる小遣の餘りのみ遺しけるに左司馬は怒り或は憤り己れ遠くは行まじ追駈くれんと思へども足痛みて歩行を得ず意外に氣が操み心を勞せし故か脚氣心臓に衝突して動氣胸に迫りアッと一聲悶絶せしかば當家の主人長兵衛も出來り種々介抱なし醫師をも喚迎へて療養せし漸く聊か癒りける左司馬は病床にあつて惟々考ふるに伊之助も吾に從ひ伴なして敵討なさんと一時は決せしならんが吾不孝にて道中にて斯る病氣に遭遇ひ歩行自由ならざれば何時全快せんも豫じめ期し難く然る時には此上の艱難如何あらん万一にも怨敵七五郎に邂逅とも討果す抔は思ひもよらず返り討は必定なり然る場に至りては自分の性命も全たかるまじと思ひたるより伊之助は吾を棄置逃去たるならん斯る心の發するも吾病氣よりの事にして伊之助を憎むは愚痴なりき然は然りながら所謂去際の駄賃とて旅費を悉皆携帯せしこそ憎みても／＼尚惡むべき奴なり又松島氏が自然旅費に欠乏せば申し來れよ何時にても用辨すべしと云われし一言は伊之助が聞居れり偖は大垣の方へ參りたりと下婢の言葉もあれば松島氏を欺むきて此上に旅費を騙取せんの企ならん

イデ此事件をヤ送りて伊之助か詐僞の術を豫防し且は旅費を借て療養に手を盡し寸刻も早く平癒なし讐敵七五郎が所在を捜索せん然なり／＼と吾に問ひ吾に答へて矢立取出し一通の書面を松島に宛て認めんとせしが又思ひ變へ如何に病氣の爲とは云ひなから三十日餘の日子を消費し漸く美濃尾張の二國を尋ね倦み京坂にも到らずして途中に病煩ひ伊之助如きに旅費の準備金を奪い去られたりとノメ／＼云ひ遣さんや假令乞食非人となり果てもヤワカ敵の討果ざるの理あらんや今宵人の寐靜りし間を窺りて密に逃出躄となりと吾志ざす京坂に指て到り敵の在所を探索せん……イヤ待て暫し當家に滯留なしてより十日餘り兩人の旅籠代の拂ひなければ無錢宿泊なりとて追駈來らば歩行不自由の自分なれば必らず追付れて憂耻を見ん夫より一大事なるは彼の七五郎に遭遇ひ敵討の勝負をなさんとするとも躄同樣にては本望達せん事は思ひもよらず無慘／＼喰込の惡名を受け又は返り討に遇んよりは寧そ切腹して相果るこそ遂に優ならん死すべき際に死せざれば死に增るの耻辱ありと斯る時にや人は死すべくと詠せし和歌の斯る時とは乃ち今日只今の斯る時を云ふならんぞ彼の祖宗遺傳の武士氣質の徒に死

するのみを潔しとして百折不撓千挫不屈の耐忍の力に乏しき左司馬が決心こそうたてけれ千思萬考なすとても一旦死すると決せし已上は他に思慮の出べき様なければ愈よ屠腹自死と決し繼母きみを始として松島四郎等へ宛し遺書を記し外に當家の主人長兵衛へ宛たる一通は遺書の屆け方其他吾身の死體の取片付より衣類兩刀を賣却なさば延滯の旅籠代並に何くれの雜費には不足あるまじ殊に差料の刀は涙の平行安脇差は無銘なれども備前作にて適れの切味なればなりと折紙等迄行李の裡より取出し揃へ置夜の更るを待居りて旅客家内の安眠を考へて鬚破時分こそ來りたれど蒲團の上に座を占て腹撫摩り彼の備前無銘の脇差にて既に斯よと見へたる處をアー暫〻と聲懸て隣の室より飛出して白刃持つ手を確乎と捉しは何人なるか後回に至りて委しく說明すべし

第八齣

松島四郎は江戸町の道場を引拂ひ齊藤左司馬の後見人兼道場預り師範代の資格を有して同家に引移り已が門弟とも合併して日々稽古を爲すに付ては猶年齢若き未亡人きみと仝居せんは人口も如何あらんときみは別莊に隱居なさしめて有りけるが左司馬が出發してより五十日間許後の事であつたが或日稽古場に出て門弟子の試合を撿分して居ると飯炊の下男が次の間から手を支へて

下　ハイ先生に申上ます……伊之助が只今皈りまして一寸先生へお目通りが願ひたひと申して……

四郎は一寸小首を傾けて

松　ム、爾か……モーツイレまうから居間で待て居ろ……

と下男を臺所へやつて考へて見たが首尾よく敵を討たなら花々敷便宜をする筈だらうに極内々と云つて來た事を思つて見ると何でもあるまい……旅費を消却したのには少しく早過る……ハテ何であらうと……思案しながら門弟子の試合もそこ〱にしまつて伊之助に面會して見ると

伊　是は〱松島先生先以て御壯健で……

松　伊之助……大きに御苦勞だつた左司馬君も若輩で定めて何かも道中も付添て居る汝が骨折だらう……

伊 へ丶丶恐れ入ます骨折は更々厭いませぬが若旦那には實に困りました

お ハヽソ如何致したなー無旅行馴られないから……

伊 イヤ爾云ふ事なら宜しいが實は七五郎の親族が宮の驛で女郎屋をして居ると云ふ事でございますで先づ最初に宮迄參りましたが桔梗屋と云ふ旅籠屋へ取敢ず宿泊まして明日から七五郎の所在を捜さうと思ひまして僕が偶と大熱病を煩つて然も毎日發熱と來るもんですから晝夜床に臥つて居りまして一向何も存じませんで居升と若旦那は毎日〳〵敵を捜すと云て初めの間は晝過からお出ましになつて夜分の亥刻子刻頃にお歸りでしたと云ふ事ですが夫が泊つて翌朝お皈りになり僕が病氣の全快します頃には晝もろく〳〵お歸りなさらないで三日か四日目位に一寸お歸りがある位どうも變だと思つて種々問合せますと有う事か有るまい事か何とかヵす娼妓にお染馴が出けて夜泊り日泊りの流連御異見申上ても馬の耳に風襟に釘其結局が女郎屋にも旅籠屋にも負債が出來て二進も三進も行け無い次第で娼妓は取るものを取つて素漢貧とおなりなすつたを見たものですから木で鼻を括つた樣な

待遇で今日では女郎屋が登樓無いと云つた始末で若旦那も始めてお目が覺てアー土狐に魅された惡い事をしたと懺悔をなさつて僕へのお謝絶これから心を交換て敵の所在を搜す事に懸るからどうか當驛を出發の出來る樣に心配してくれよと淚を流してのお依賴ですが桔梗屋の方でも旅籠代が澤山延滯て居るもんですから逃られては大變だと門口からは一寸も出さ無いと云ふお慈悲の牢住居も同樣進退谷まるとは實に此事でせうと存じますので此上は卿にお縋り申上て奥樣には御內々で金子を拜借致しまして宮驛を一日も早く出發ます樣と宿屋へは其由を云つて若旦那を奴質に遺しまして夫で歸りましたのでございますから……

と云つても四郎は默つて素知らぬ顏をして居るから伊之助はコィツは失敗つたと思つたが云つてからは詮術が無いで伊之助も默つて四郎の顏を見て守つて居ると四郎は莨を二三服も吸うてブーと煙を吹出して

お ムー了解つたタがお君殿に云は無いで內密と云ふ譯にもいかない殊に目下はお君殿も別莊住居で居らるゝから今晩拙者が別莊へ行つて委しく話しをして是非とも

用辨する樣にして置くから汝も戌の刻時分から別莊へ來るがよい……
伊之助はサーむまいしめたと心で思つたが其樣な顏もせぞ
伊　早速御心配下さつて僕も安心致ました……
當夜も既に子の下刻齊藤の別莊の庭の松の幹に眞裸で後手に縛められて居るのは僕の伊之助で椽先に手燭を持て見て居るのは未亡人お君で二尺有餘の白刃を突付て拷問なし居るは松島四郎なり
松　左司馬が身持放埒に路費を消費したと云つたは眞赤な虛言と見て取つたから今晩當別莊迄出て來いと云つた計畧の穴に陷つて出て參つたは天の罰だサアキリ〳〵と白狀せないと此白刃が胸へ當るぞ……
と云われて伊之助はガタ〳〵戰慄ひ合わ無い齒の根を無理に喰しめて
伊　ハイ〳〵申上ます……どうぞ性命をお助け下さい……
と是より土山の驛の大黑屋にて左司馬が病中に旅費を奪い同家の婢僕を欺き僞り大垣へ用向にて罷越す旨を告て逋亡したる一伍一什を自白せしかば四郎とお君は眼と眼とを見合せて笑を含み
松　爾だろうと思つて居たのだ……然して左司馬の病氣はどう思ふモー全快をして居るだろうか
伊　イヱ〳〵どう致しまして醫者の診斷では今一回心臟へ衝突けましたらモー夫でおしまいですと……
お　ぢや……汝モー一回土山迄行つて實否を糺してくれまいか……生死の程を……
伊　どうして〳〵万一若旦那が御存生で僕をお見付なさいましたら再び活ては歸られませぬ
松　ナーニ密に聞たら夫で好のだ
伊　聞て何になさいます……
と問へはお君は椽先より
君　松島さん……縄を解てよく判る樣に云つてやつて下さいな……
松　お君殿のお放免だからサー

伊「有難うございます……」

第九齣

板屋を迸る霰の音も戸隙を洩る小夜風もいとゞ寒けき冬の夜を四時も春なる温柔郷泉州堺の高須の游廓万春樓の奥二階に轉寐せし客人は年齢は三十三四背の丈高く骨太く肉肥て脊ぎり面長く色黒けれど柔和にして獰悪ならぬ幅廣やかなれど○○○○さだけ短き着服の裾にて踏反返り熟睡姿の大の字形りも枕は肩の向ふに飛んで犬の字と變じ鼾の雷に似たるも椽の障子に響きて地震かと疑しむ該枕邊に無寒さうな寐間衣裝で客人の表衣を袍さんと喚び起し居るは目下當廓に双ぶ彼無き全盛の花魁八重咲の妹娼妓今日突出の雛妓八重菊なり

菊「モシ〳〵上の召服をお脱なすつてお安眠なさいましお湯を酌ましたから召上つて……」

と搖攪れば客人はムニャ〳〵〳〵と云うて寐返りした儘でいびきグー〳〵他愛無れば八重菊は胸撫下して獨言

濃州池田郡和田村の鄕士阪本長左衛門の長女菊枝が此樣な姿になつたと思ふと夢の樣な……左司馬さんの跡を慕つて出てから艱難は云ひ盡され無いが中にも順禮になつて大坂の千日の墓所で呻吟つて居たを親切に云てくれた二人の人を便にして宅へ行て見れバ巾着切の親分で到底所持て居た金子は悉皆奪れてしまつて結局には此高須へ娼妓に賣られ今日突出しの恥かしさ夫と定まつた左司馬さんの他の男ゞ枕が交しては貞婦二夫に見ぞとある操の道に缺るのは知れてある況して一双の玉手千人の枕半點の朱唇万客嘗ると云ふ遊女傾城にどうして……マー夫より寧そ死んでしまうと幾度思つたか知れないが現在舅齋藤宮内さんを討て立退た敵七五郎に怨の一刀なりと切付て其上操を破つた辨解に自害しても遅うはあるまいと今日迄命を存へたがどうマー知らない男と寢て帯紐解て……今晩今宵の只今が左司馬さんで無い他の男と肌身を觸るが初めだから仝じ死ぬなら只一回でも肌身を穢さ無い其中に死ぬ方が好であらう……幸ひお客さんも寢入鼻邪魔の這入らぬ間に早う……ムー爾ぢや〳〵……

と客の枕下に置たる差添執るより早く鞘を拔て咽に當て

菊 南無阿彌陀佛……

と稱名なし既に恁よと見へたる際寢たりと思ひし客は聲を發ち

客 惡い〳〵〳〵夫は惡い……

と云ふに八重菊は駭き狼狽脇差袖に押隱せば

客 惡いには違い無い如何にも拙者は惡い男乃ち無男だ無男でも何處かに旨味がある
せ〳〵

と云つた限で寢返りし迹は鼾のグー〳〵〳〵扨は寢言か心の迷ひに自害を止められる
と思つたは吾ながら未練なりきと我と心を勵まして再び白刀を咽に當て南無阿彌陀佛
と口の中に唱へて今や死せんとするを彼の客人はガツと刎起突然白刀をもぎ奪て

客 孝貞兩全うして其身を立つる詮術があらう……不圖聞た主なり師なりの齋藤先
生が横死の趣き且御子息左司馬君の妻女とあるからは巨細に話しを承まはり及ば
ない迄も一臂の力を添へ敵討もさせるでござらう短慮な事はせぬがよろしい……

と云ふを聞より八重菊の菊枝を驚き

菊 宮内樣を主なり師なりとお云ひなさる你さんは……

客 拙者は岡本鎌治と申して當地寺地町に町道場を開業して鎗劍二道を指南なす者

菊 其岡本先生が宮内樣を……

岡 主人なり師匠なりと申すが御不審ですか……

菊 ハイ其仔細は……

岡 若州小濱の酒井家の浪人にしてから假に木下多市と稱して倘其頃は齋藤宮内殿が
紀州家に御仕官中若黨奉公に住込だが鎗劍二道の執心なとて內弟子の一班に列せ
られて御浮浪の後迄召伴られ大阪迄參り居つたが今の細君が京都よりお召伴なさ
つた照と稱ふ女中と密通して亡命しましたが目下は前申す通り鎗劍の稽古を初め
てから門弟も數多出來て富にはあらねど貧しからぬ活計て居れば今日限り落籍し
て左司馬君と配偶も致さう……幸い貴孃の抱へ主も拙者が劍道の門人なれば百事
相談の都合もよろしい……何にしても遂に無い弟子中の酒造家の主人に誘引せら

れ一夜の春を買つた敵妓が左司馬君の細君とは實に不審議で演劇の樣だ……併し宮内先生の横死の轉末又左司馬君が復讐に出立せられて目下は何處に居らるゝぞ仇敵は何處の何人なるぞ……

と問れて八重菊の菊枝は在し次第を落無く洩無く語り聞ゑば岡本鎌治は一伍一什具に聽取りて談合なし翌日八重菊が抱主某樓の主人に談判して師弟の因を以て特別の計らいに八重菊を贖ひ求めし身の代だけの金を受取て落籍なす事と決し鎌治は一家の財産を盡し八重菊の身の代に充て自家にてこそ引取ける鎌治は妻のお照に菊枝を保管させ置き左司馬の所在を捜り索め、協力なし讐敵達摩の七五郎を首尾克く討取つて目出度く菊枝と左司馬と婚姻の式を執行させんと門弟は悉く謝絶し寺地町の道場を開渡して甲斐の町の裏店に一戸を借宅し是に二人の婦人を住居しめ僅の寶殘りし所有物品をも賣却して雲を目的に出行しは安政五年の十二月上旬なり

第十齣

本朝續文粹に載たる右大臣師房卿の文に曰く天下の勝地は大堰川に過たるは無し城中の名區は嵯峨野に若くはあらずと實にや春の錦と稱ふなる都の花の中にも又類ひも嵐の山の櫻樹は昔龜山の院の帝の恁る櫻の種栽て花の山となしけんと誰人かの詠せし三芳野の種子を植させ給ひしとぞ聞ゆるも理りにて今も千株の花の梢他目に花と白雲に見紛ふ況て大堰の川は帶に似て山の腰に廻れるが盛りの影を寫し散れるを浮ぶる杯又何處にかは思ひ競べん然れば花の時に及ぶ每に貴ときも賤しきも都の町を傾け鄙の野面も打やりて此處に集ひ遊びて士女絡繹轍の影衣の匂ひ至る所群をなし其繁昌雜沓謂ん方ぞ無き頃は安政六年春彌生の上旬一日二日と小歇無く降續きし頃日の雨の名殘無く霽て殊に空さへ麗かに晴渡りて寒からず熱からぬ長閑なる日の晝に咲め終らず散も初めぬ眞盛りの花觀んと群集ふ人の數も一入多にして三軒屋の料亭は素より大堰川の岸に沿ふ數百の掛茶舍總て客人の山を爲し渡月橋は往ふさ來るさの人押合ひて橋柱も撓む計りなり適齡の女兒に今日を晴と粧飾らせて手を携へ大悲閣或は法輪寺に參詣なす人の親の心は吾子の福壽と知惠とを禱るにか將その姿色と衣服とを人に誇るにか島原の娼妓祇園の歌妓舞妓の美麗しさを夥多拔擢きて大きやかなる舟幾艘かに乗せつゝ

笛に皷に續拍雛して清瀧さして泝れるは漣や滋賀の大津の米商人にあらされば玉敷の都の西陣なる絹織る家の主人にやあらんぞらん白河の上皇の三個の竜頭船首を浮へたまへる御遊をや學べる潜上の歡樂とや云わまし驕奢の擧動とや云わまし後れ走に來りたる靜間の岸に立ち手を揚げ聲を放ちて舟を招ける樣は源師が殿れてまいり就れの舟にまれ寄てよと招き給ひたる故事さへ思ひ出されていと可笑し其他瓢を杖の先につけて花に浮かれ松に攀ぢ楓に縋りて途も無き隈々をたどる風流男あれば遍舟に自ら掉して其處の岸此處の雎に寄せ春を停めぬ水の柵に花を惜む又は淺瀬を狙ふて鈎を垂れ若魚の鈎を爭ふを樂み礫かちなる所に網を敷て鱗と共に落花を漁るなど千狀萬態の春の遊びを爲せり恁る人間最上の歡樂も盛者必衰の眞理に洩ず天龍寺に撞く晩鐘諸行無常と響き渡れば人は右往左往東奔西馳四離八散氈を疊み幕を脱し樽を擕げ瓢を提げ去り行て黄昏ならんとするの際は僅に花や今宵の主ならまじと峯に落ちし日の月を賞する歌人と何の巳れが櫻かなと立ぬ腰を据へて廻らぬ舌に管を卷く生酔の三人四人木の下路に磧の面に殘れる而已なり折しも已が家路に歸らんとてか三弦に手拭を被らせ笠を脊に負いて來れる二人の婦人は袖乞と見へて二十六七と十八九と覺しき昇しからぬ人品なり

他に顔を見らるゝのが厭さに晝の中は笠を取らないから人顔の見へ無い今頃になつて脱ぐと氣が清爽としますねー お照さん……

と云へば二十六七の婦人は

爾でございます……鬱としくつてお困りでせう……困ると云へば良人が左司馬さんのお踪跡を探しに出られましてから百日の餘りになりますので貴孃もお案じなさりますし妾も心配でなりませんので堺の家をしまつて京都へ參つて恁云ふ眞似をして雜沓の中を氣を付て居ますが左司馬さんなり鎌治どのなり皆目見付りませんには實に……

と云へは十七八の婦人は

お照さん……今日は妾か愚痴な事を云はないと你さんの方から……

照　成程爾でございましたねー然し菊枝さん……貴孃が此樣な淺間しい姿におなんな

すつたと見ますと涙が溢れて言を謂れませぬ……

菊 何の妾は心から厭いませぬが氣の毒は你さんですは折角堺で立派に道場をお開きなさつてお出でなさつた鎌治さんも妾の爲にお家をおしまいなさるしお弟子も謝斷なさるし果の結局には你さん迄が此樣な姿に……

照 ナーニ妾は此樣な事をせないとならないのは當然ですはね――

菊 何故

照 ダツテ……御主人のお目を忍んで鎌治殿と密通して逍亡してしまつたんですもの罰ですはね……

菊 你さんが罰なら妾もでせう……

と話ながら步行來る淸瀧川の傍なる藪陰より顕れ出たる五人の非人大手を廣げて両人を押取卷

甲 新米の二人の婦人……

乙 誰に云つて仲間入を何時したのだ

丙 姿色がよくつて藝がよいので

下 毎日收入が澤山あると云ふ評判だ

戊 仲間入の饗應に

甲 吾輩が寄つて馳走になるのだ

乙 儲けた錢を宿越せと云ふ樣な吝な事を云わないから

丙 迹で減る物品と云ふでも無し

丁 一人は萎れた花だけれどまんざら色香が無いでも無へから

戊 迹口に不承してお娘の次へ汝を廻して

甲 二の膳ともに箸を取るから

乙 翌から毎晩送り膳を玆で待て馳走になる

丁 思ふ存分饗應すが好だらう……

と口々喋言て引抱へ手取足取亂暴狼藉もがく二人を二人懸り押へて既に有るまじき所行をなさんとする處へアレ〳〵と両人が喚わる聲を聞てか走らせ來る一挺の轎非

人は見るより面倒と二人は捨置雲霞敗中深く逃入けり

第十一齣

二間四方縄にて地上を畫し正面の見付に張し幕の如き六幅の木綿は紺地にて眞中は家傳速妙膏右に切疵摩疵突疵挫き打撲一切によく効能神の如し左に本家若州小濱鳥山隼三郎と白字に染抜たり其前に眞鍮の金物と兵を晃々と打付たる高長き荷ひ函を二個置たるが是にも幕に記せし家傳速妙膏云々の文字を大書せり其他五尺六尺七尺と三振の大太刀に長刀鎗鎖鎌等を陳列し三寶を三つ四つ置て就中大きなる三寶の上に膏薬の紙に伸せしと貝に入しを堆く積たり該縄の區畫の中央には一人の男木綿の紋付の綿入に白木綿の兵兒帯を縄の如く捻て結び荒縞小倉の襠高袴を裾短に穿ち紺足袋に一尺歯の高下駄を履き白木綿の玉襷を厳めしく掛け四尺の大太刀を腰に手挟み仁王立に突立たり三尺許り進んで一人の男之も全じく紋付の綿入に木綿島のカルサンを穿ち麻裏草履にて蹲踞たり是ぞ之れ江州大津本要寺の境内なる一六市の法會に際して露店せる膏薬商人なり彼の仁王立に突立つたる男は稲葛竹簾の如く取圍みたる數百の看客を眼下に見て大音聲に云へるは

拙者方に販賣致する處の膏薬は世上に普通たる膏薬とは違ひ鳥山氏の一子相傳に致して今を距る十五代前の先祖初代隼三郎竹生島辨財天に七日七夜参籠して祈誓を掛けましたる處ろが七日満ぞる暁に善哉〳〵と微妙の御聲がすると等しく本殿の扉が自然と開けまして天女出現在て授け玉わつたる處の膏薬に致しまして本書効能書に明細記載致しましたる通り長刀劍庖丁小刀鉄剃刀鉞鎌等の切疵より鎗錐釘等の突疵は申すに及ばす其他一切の刃物の摩疵かすり疵削り疵チョツキリ疵等は縫わぞ洗わぞ忽ち貼つて忽ち治する筋骨の違ひクジキ疵打撲一切疵違ひ肩の凝り腰の張りは貼りさへすれば癒るは保証懸迄奇々妙々の効能ある速妙膏でございますればお購求なさつてお試撿なさい膏薬代は大貝が二十四文小貝が十五文紙に伸たるが一枚が三文宛お購求下すつたら御愛嬌に當膏薬と共に辨財天より先祖が授つかたる處の神傳居合の一術を御覧に入れます第一番が拙者只今腰に提居りまする中身四尺の大太刀を物の見事に拔て御覧に入れまして引續いて五尺六尺

七尺と蕊抜まして御覧に入ます……コリヤ〳〵奴お客様へ膏薬を賣れ……

と云へば最前から蹲踞つて居た男は立て見物に目禮し

奴　ハッ左様でござい先生向ふから御用と仰やる

先　コリヤ〳〵奴御用とあるは何誰様だ

奴　ハッ左様でござい二十四五の赤茶瓶の旦那が御用と仰やる

先　コリヤ〳〵奴鹿想ヲすな二十四五の茶瓶の旦那とは何だ

奴　ハッ左様でござい御頭上が疱痕で禿て若い茶瓶で若茶瓶……ハッ先生チヨツキを召した姉さんが御用と仰やる

先　コリヤ〳〵奴鹿想をヲすなアレはチヨッキで無い京都の伴天だから長が短かいのだ

奴　ハッ左様でござい又々此方から御用と仰やる

先　奴御用は何ら様だ

奴　ハッ左様でござい右の方にござるグリ髮の媼さんが御用と仰やる

先　又〳〵奴鹿想をヲすかグリ髮の媼さんがあつて耐るものか

奴　ハッ左様でござい前が禿たでグリ髮と見へたのでござい ハッ盥を冠つたおかみさんが御用と仰やる

先　コリヤ〳〵奴何を申すか盥を冠つてござるおかみさんが何處にござる

奴　ハッ左様でござい黒ん坊に髮生へ薬で奴が見損つたのでござい ハッ御用と仰やる

先　コりや〳〵奴何誰様だ

奴　ハッ左様でござい御用と仰やるのはアノー後ろにござる陳笠を着た下婢さんでござい

先　又失敬を申すかアレは京都の髱だから如彼見へるのた

奴　ハッ左様でござい先生お客様が大太刀を抜けいと御催促でござい

先　ムー承知だ是で賣仕舞

奴　サー御用は如何でござい〳〵モー賣仕舞でござい〳〵ハー賣れましたオヤ〳〵先生モー一貝御用と仰やるハッ左様でござい

先 ナニ御用と仰やるか是非が無いモー一貝賣う愈よ是か賣しまい

奴 ハッ左樣でさいイヤ叉困つた御用と仰やる先生如何でござい

先 強て御用と仰やれば賣らないのは御愛敬の妨げだお賣りヤせ

奴 ハッ左樣でござい困りました一枚御用でござい

先 ナニ御用と仰やる一枚か一枚ならお商ひヤせモー〳〵御用と仰やつてもお謝絶申せ賣しまい〳〵と云つて賣つては鳥山隼三郎の看板に關係る愈よ以て鳥山隼三郎が辨財天感德授受の居合の秘術一子相傳の大太刀を先づ四尺より五尺六尺七尺と拔分て御覽に入れます……

と高聲に喚わるを群集の中より鳥山云々と云ひしを聞付てか人掻分て進み寄し一人の少年は深編笠に面体を隱せは容貌は判然せねど十七八歳とこそ見へたり該少年は彼の先生と稱する男の顏を不審さう眺め居た叉彼の奴と稱する男の顏を見て益す是はと驚きたり

第十二齣

江州大津の旅人宿越前屋の下等座敷の小室の四疊半を借受て滯留なす行商は若州小濱の賣藥業鳥山隼三郎〆賣子の伊助なるが今日は一六市の本要寺の晝商ひが意外多額の骨休めに今宵は夜店を休業して伊助は柴屋町へ素見に還り隼三郎ハ夕飯の膳の上に一盃を過し手枕はウッ〳〵と轉寢して居る處へ出て來たは當家の下婢なり

下 賣藥の旦那何誰かお客樣がお出になりました……

と云ふに鳥山は起直り

鳥 アー好工合に寢て居た處だつたお客とは如何云ふ人だ

下 ハイ十七八の好男子の前髮のお武家樣です……

と云へば鳥山は何か胸に覺へかあるかサーむまいと云つた樣な顏して莞示と笑つて

鳥 お名義は聞かなかつたか

下 ヘー齊藤とか仰しやりました

鳥 愈よ然た

下 何か御用でございます

鳥 ナーに汝の知た事ぢや無い此方の事だ……是へ御案内申して下さい

下 ハイ……

と立て行つたが直に案内して伴で來たは齊藤左司馬なり左司馬は鳥山に一禮したが尙何だか合点が行ないハテ變だと云ない許の顏をして考へて居ると鳥山は鄭重に客座に請じて

鳥 是は若旦那左司馬樣打絶まして……

と云ふに漸う左司馬も考へ出したと見へて

左 ムー成程你は木下多市殿談別てから恰是十箇年……

鳥 お見忘れもございませなんだか木下多市は假の名で只今は前名に復して岡本鎌治と申します……

左 夫に何故鳥山隼三郎と……

岡 ハイ變名致して居るも卿に拜顏を致したさで……

左 夫は全体如何な譯で……

岡 お了解なさらないのも道理です……

と是より菜杉に廻り合たる一條より落藉して妻てるに保管させ置て左司馬の踪跡を捜索爲に他行せし一伍一什を談話りて

岡 恁ふ次第でございますで卿の拜顏を得まするには敵七五郎が實名が鳥山隼三郎と稱しましたら必らず捜しにお越なさらうと思ひまして……

左 爾とは知らずツイ二三日以前の事戸外を通る雲助が朋輩の誰彼とかゝ摑いで居た長持が肩を外れて足首の骨を挫いたのに速妙膏を貼つて癒つた事から目下大津に行商する鳥山隼三郎が家傳だと云つた話しを聞くと其儘で飛出して參つた處が今日本要寺で你を見受たら名は七五郎と全名でも人が違つてあるがよく〳〵考へて見ればどうも見た樣ではあるが思ひ出せないから宿を尋ねて參つたも面會の上で何故鳥山と稱せられるか聞うが爲めで……夫れに前刻見受たがアノ膏藥を賣つて居つた家來は何處へ……

岡 貴子の伊助を御存知ですか……

左 承知處か彼奴の爲に實に困却致したで……

岡 伊助は拙者が卿を御探し申さう爲に膏薬賣と身を扮さうと思つてる際不圖京都の宿屋で仝宿しまして生國を聞ますと美濃大垣在と申じますから到底賣子に抱へましたも万一七五郎に出會つたら人違ひをせぬ樣に彼奴に見分させやうと思つたから……然して這奴故御困却なさつたとは……

左 他でもござらぬか伊助と云つたは變名で本名は伊之助と云つて拙者が宅の下男だが敵討の供を懇望したで聞届けて供に伴れて遍歴して居る其中に脚氣の病氣を煩つて土山驛の旅籠屋で療養中に看病に倦たか歩行不自由の拙者を捨置旅費の金子を悉皆奪ひ取つて携帯なした横着者の人非人……

岡 爾とは今まで知りませんなんだ鳥山隼三郎その僞名を聞て不思議な事もあるものだと云ひますから何だと聞ましたら僞の在所に居つた博奕打の達摩の七五郎の本名だと云つた事もありました……爾して卿は目下は何處に御出でございます

左 只今も申した土山驛の旅籠屋大黒屋長兵衛方に……

岡 エー大黒屋……アノ長兵衛に……

左 ハイ鎌治殿には長兵衛を御存知ですか

岡 知つて居ますとも長兵衛は妻てるが實の兄でございます……

と云へば左司馬は膝を打ち

左 夫で仔細が了解ました伊之助に旅費を持逃され進退谷つて切腹をしやうとした處を長兵衛に留められ夫より敵討の一伍一什を打明て話しましたら何やら謎いた摸樣でしたが種々親切に介抱看病を致しくれられ衣類の洒ぎ洗濯から殘る方無い世話をしられ全快する迄療養して居よと親身も及ばない待遇に漸う此程床上もしたが偖は妹が你と逃亡したのだから逭に爾とも云ひかねて古主の拙者を大切に致しくれたのでせう

岡 如何にも爾でございませう現在妻お照が兄の宅に御滞留なさるのを夢にも知らないで居ましたとは……夫にしても伊助奴は卿を置逃にして如何しましたらう

左 多分故郷へ歸つて來て松島氏を欺いて路費を騙り取つて來でせう

岡 追付け皈つて來ますでせうから欺いて白状させませう
左 ぢやー歸つたら拙者は次の室へ潜伏て居やう
岡 夫がよろしい……イヤ足音……ソレ……
左 ム！……

第十三齣

京都知恩院舊門前に島屋十次郎通稱面壁の十二あて人足口入を業として某院の宮の非常人足屯所の頭をなす俠客ありしが此程島原の廓にて諸司代の廏の某と膳所本多家付屬の鳶の某と口論せしより一場の悶着を起し遂に双方の部家と〱の喧嘩となつて血の雨を降せて命の交換を爲さんとするに及びしを面壁の十が仲裁にて事平穩に歸したるより兩部家頭と面壁の十二と三人は義兄弟の盟約をなし後來水魚の交際をなさんと今日吉辰を卜し嵯峨三軒家の柏戸に於て該盃の式を濟ませ夜を侵して駕に乘り急がせ立ての皈途に清瀧近く來れる頃アレイ〱と婦人の泣號ぶ聲の聞ゆるより弱を扶助け強を挫拉ぐ面壁が平素の性質ウヌ狼藉者迯すなと駕を急がせ走らせしが案に違はぞ四五人の非人輩が二人の袖乞の婦人を捉へて强姦なさんぞ摸樣なりしが提灯の明を見るよりも蜘の子を散らすが如く竹林中深く迯失たれば骨折なさすして宜しかりきと汗伏す兩女を扶け起し新に駕を二挺命じ我家を指て伴れ皈りしは三月七日の夜の事なりけり該兩女の袖乞は前回既に兩女が談話中に名を喚合つたれば今殊更に記載する迄も無く看客諸君は御承知ありたるべし之は是齋藤左司馬が未婚の妻菊枝と岡本鎌治の妻お照なるが不圖も面壁が厄介となつて全家の食客となりたれど故意と姓名を云わず假は菊枝はお秋お照はお光と詐り稱して名古屋在某村の産の姉妹にて母は十年以前に死別れ父は昨年十月狂氣して家を出たる儘皈り來らざれば其蹤跡を探索んと憑非人と迄に落魄たる由を欺き語りければ十二も憫然に思ひて世話なし居ける或日十二は例の如く朝より某宮の人足屯所に行きし不在中兩女は佛壇の掃除をなし居けるに何心無く過去帳を見るに 釋教了俗名鳥山隼人五十八歳往生隼三郎實父とあり偖は敵七五郎の所縁の者かと兩女は不審く互ひに考へ見れば面壁と云へる渾名の達摩に緣あり七五郎の七五を合算すれば十二なり鳥山の二字を合書すれば嶋となれば愈よ以て訝しく又達

摩の七五郎と稱へるは脊に達摩の肌繍あるか故なりと云へば証據の脊の黥を見顯して然る上にて認め得なば假令左司馬は居らすとも舅の讐古主の敵 尋常に名告懸て勝負せんと兩女は心掛て居たりしが兎角なす中に五月上旬となりしが今年は前年に閏ありし故にや例より暑く十二も湯屋に到りて浴するを止て宅にて盥に湯を盛りて沐浴する事となりしが此際脊の汗を流さんとふ照のお光が手拭にて摩る振りして見けるに案の條達摩が壁の頽崩より白眼居るを圖せる黥なりければ色にも出さぞ流し終りて當夜密に菊枝のお秋に告知らせば共に天にも昇る心地せられ雀躍なして悦びしかど敵は適れ剛の者慾いの事して返討にせられては詮無しと其機會をば待居たるが或夜面壁の十二は何處にてか酒に喫れ熟醉なして歸り來り打臥しが忽ち雷の如き鼾しけるに盲龜の浮木優曇華の花待ち得たる今日今宵と準備の懷劍拔放ち寐刃を合して寐息を考へ双方一齊に左右より詰寄つて言をも語ぞ馬乘に骨も徹れと胸板へ刺んとする此時早し此時遲し面壁の十二はガバと起き二人の懷劍モギ放ち膝の下に曳敷て

十 エー浮雲い何をするのだ汝等は八鬼山の肉緣の者かトヽどうだ……

ト云へば兩女は口惜さに涙ながらの立腹の高聲

菊 チエー失敗たお殘念な妾は齋藤左司馬の妻菊枝……

照 以前は齋藤に傳女雇人をした照と稱ふ者……

菊 舅の讐……

照 古主の敵……

菊 己れ討いで……

照 エー置くものか……

とあせりもがくを十二は動かせぞ

十 昨年美濃の久世川で八鬼山始め五人の奴を討果した覺はあるが齋藤の由緒の者に敵と呼れる覺は無へ

菊 イヽエ爾は云わさせぬ其五人の中に舅宮内樣もお交りなされ……

照 親旦那樣の御死骸があつたからは……知らぬとは云わさせぬ

と兩女が云ふに不審顔

十 己輩が討て立退たは八鬼山に五十嵐小林外に三五の角力三人

菊 イヤ〳〵八鬼山辰五郎の死骸は中に無いとの事……

照 夫は定めて人違ひ

十 齋藤先生は名高い劍道の名人我輩如きの手に懸る御人て無い殊に大恩あるを何で〳〵……辰五郎の死骸の無いが何より不思議だ右の肩から腋腹懸け筋違に二尺許り斫下たから臓腑も出て倒れ死んだが……助命る抔とはとんでも無い事……懸云つても疑つて僞りだと云ひなさるなら如何樣とも尨任せ切るとも突ともなさるが好い……

と扶け起して懐劍を兩人に渡して身を摺付け

十 然し是には何奴か計略したと考へられるが篤と思案をなさるが好からう……

と云われて有繫に兩人の婦女も拍子拔して猶豫ひ居たり

第十四齣

ヤートコセィの伊勢音頭箱根八里の雲助唄馬の嘶き介卿の話し下に居ろ〳〵と鳴く先拂ひあれば通り一遍と錢乞ふ金毘羅参りありちーちーはーはのと咏歌あげる西國巡禮來ればヒョー〳〵と高聲で走る飛脚往くは東海道の咽喉五十三驛の第一號江州大津の八町札の辻なり彪肩摩轂聲の中を佇立て何か覗て居る大勢の人

○ 一体全体何です

● 何と云つて大變です

△ へー大變とは……

□ 情死です

◎ ハーテナ

○ 何者ですねー

□ サー婦人は柴屋町の藝妓でせう

● 男は……

□ 百石町とかの左官ですと

△ 紫の朧染の對の衣裝に

◎男は一本指に手拭をしでいて肩に懸けて
○婦人は吹散らしに手拭を冠つて
●向ふが叡山に湖水の遠見で
△長唄浄瑠璃惣出囃子で……春の夜の夢はあやなし夫かとよ其夢よりも果敢無さは何とやらして何としてど……長唄が一くさりあつて花道から何れ男が前へ出ると、婦人が後からつか〳〵と出て……
□アーモシ〳〵何を云つてなさる
○情死ぢやございませんか
●ですからサイ……
△釣り込れて……い〻〻
皆々ハ〻〻
△夫で其情死はどうしたのです
⊡どうか知れないのですが二人とも素敵に若年のです

イハ〻ン何歳位です
□ヘイ爾ですねー二人が二人ながら滅法界色が白い頗る別品と来て居るからチト若くは見へますかも知れないが男は十六位の前髪です
◎夫では手間賃の半人か七分五厘しか取れ無いのでせう
□マー爾でせう
●女は
□爾ですねー年弱の十四か年強の十五……十六にはなりますまい
△それが藝妓ですか
□エーナー二藝妓の卵で舞妓か見習いでせう底で死に様が變です……男が左官ですから泥鏝で咽を突たと見へます
○泥鏝で死なれませうか
●チト訝しい
△何だか……

、嘘言らしいねー

ロ 是は怪からん……証據があります眞實だと云ふ……ソーレ俚諺に云ひます……若い時の情死は泥鰌でせい……

○ 何だ落語かへ、、、

● 古いのを放心聞て居たへ、、、

△ 馬鹿〳〵しいハ、、、

、何の事たハ、、、

ロ 然し何でせう

◎ 知つて居る位なら卿に聞か無いです

ロ 是は御尤も……

△ 何にせい大變な混雑です

ロ 何でも此札の辻の高札場へ建札が出てあると云ふのが實説に近い樣です

、建札とは何か書てあるのでせう……

と衆議區々虚談蹊々風評喋々悉る雜沓を押分て進み寄り委しく讀み取つて懐紙へ矢立の筆にてサラ〳〵と書取りて人無き横街へ避たる一個の少年は之れぞ別人ならぞ齋藤左司馬なり付添ひ居るは鳥山隼三郎と僞名せし岡本鎌治なり左司馬は四邊を見廻し

左 どうも七五郎の大膽不敵には駭き入ました

岡 如何にも爾です……今アノ旅人の噂では京の三條の大橋にも大坂の高麗橋にも建てあると云つて居ました此通りの札が

左 憎いぢやないか此文言が……美濃大垣住達摩七五郎本名鳥山隼三郎事右は目下京都知恩院舊門前に居住罷在候間御用の御方は左の通り御尋下さる可く候以上……鳥山隼三郎通稱面壁の十二……

岡 敵と付覘つて居るのは知つて居るだらうのに……イヤ一寸承まわた事があります面壁の十二と稱つたら川東での親分株で某宮の非常人足の請負をして居つて所々に賭博場を設けて居ると……

左 夫では宮家の御稱號を頭に戴いて人も無げなる擧動をして居るのだらう

岡 假令宮家であらうが將軍家であらうが一命さへ持て皈らぬ目算なら恐るゝには足りません

左 爾心添へをして力を付て下さるならば明日とも云わす是から直様……

と身準備して行かんとし

左 岡本……夫ぢや全伴を……

岡 マーお待なさい……卿爾お急なさるが……惡大膽にも野法圖にも敵持つ身でありながら目下の住處姓名を公然に人た廣告す七五郎事に子分子方の部家の徒も多勢居るに相違は無い……爾でせうから充分の準備もせずでは不覺でせう……万一彼は義氣ある者にて一時の過失に老先生を討たので卿に討れて死ぬ覺悟と夫で此建札をせしと假りに考へればヨモ逃走りはせぬでせう旁々急ぐ場處ではありますまいから

左 如何にも篤と結籠をして準備の上で行くとしませう……先年七五郎が喧嘩の爲に大阻にも居られぬ處を亡父が藩中の誰彼へ申入て其沙汰を取消した事もあるとすヲりと聞た事もあれば義を重んじて我等に討れる下心かもはかられませぬ……義氣と云へは家來の伊之助彼奴程不義不忠の奴はあるまい

岡 拙者が質子に使つて居たのが卿の初めてお入りの際廊下の外迄戻つて來てお聲を聞て驚いたか風を喰つて逃てしまつたが逃足の早いのに驚き入ました

左 ナーニ何處かで出會でせう……

折柄園城寺の已刻の鐘ゴーン――

第十五齣

三間の荒格子に壹間の門口正面には菊の紋の高張提灯に幟を建並べ某宮御用と記せし提灯函等を立派に裝り付あるは彼の京都知恩院僞門前町の人入業面壁十二が住居なるが今日は出入の某宮の御所の御元前の大掃除にて家主十二を始めとして子分子方は何れも留在にて壹開靜なる赤下迦賴むーと門口から案内して入り來りし二人の武士は紋付の帷子に仙臺平の襠高袴を穿ち兩刀壯麗に脇挾みたるが肌に着籠し白の襦袢の綿をも入れし如く脹れたるは鎖り帷子なるべく絽の羽織の下が白く十文字に透けたるは木

緜の玉襷なるべくと想像せられたり悉充分の準備をなして來れる人こそ今更姓名を明記する迄も無く齋藤左司馬と岡本鎌治なり締古りたる譬言なれど浮木に遭ひたる盲龜の如く待設けたる優曇華の咲得し春に逢ひたる如く心勇みて巳れやれ七五郎の來りたらんには名乘懸て只一刀に討て捨んと鯉口緩げ居合腰になつて扣へたり彼のたのもうの案内の聲にあられ……と答へて出で來るは婦人の聲己七五郎の妻か妾か敵も片われ血祭にと云ひ合さねど左司馬に鎌治益無き殺生も敵の英氣を挫ぐの早速の計略荒膽拉く當意卽妙と刀の柄を握り詰侍つとも知るや皓歯の處女

何誰樣でございまする……今日は生憎御殿のお煤掃で衆輩不在でございます……

と云ふ聲音さへ嬋姸て最も優しく手を支へ徐かなる姿風俗に柔よく剛を制すの格言は宜なる哉拈ず扱して兩人は言をも諳はで悵然たり處女は左司馬の顔を覗て

ヤー卿は左司馬さん……

と云ふ顏見れバ妻菊枝なれば

左 オー菊枝殿か……どうして茲に……

驚ぐ二人に鎌治も驚き

岡 エー卿は菊枝樣……

と云ふ聲聞くより我を忘れ奥より馳來るは鎌治が妻のお照なれば夫婦四人は互ひに顔を見合せつゝ意外の奇遇にあつけに取られて暫時言語も無りけるが稍あつて鎌治は心付き

岡 菊枝樣なりお照なり當家にあるは其意を得ず委細を聞たいが万々一敵七五郎が歸つて參つて風を喰つて逃てしまつたら後悔臍を噛むとも詮が無からう夫より七五郎が出先を聞き歸り道に待受て……

左 尋當に勝負をしやうとの鎌治殿の御注意は道理でせう……何かは本望達した上の事として鎌治殿參りませう……

岡 如何にも爾するとしませう……然して七五郎の歸りは何時頃……

左 途次は何町を何處へ……

菊 マー〱お待なさりませ

照　敵は七五郎ではございません

同　エー夫は眞實か

左　どうした譯で你輩が……

菊　知つたのには仔細ある事で……

照　嘸お話しもございます……當家は決してお氣遣ひな家ではございません

菊　踋へお通りなさりまして……

と不審に尙も安からぬ胸に思案の兩人を强て踋の一室に伴れ行き鎌治が堺を出行てより後の話しを菊枝お照の兩姉は交代〳〵に物語れば

左　夫では危險い其處へ面壁が出て來て助けたので……

菊　ハイ夫から二人が厄介になつて居ます內に……

照　達磨に緣ある名前の面壁と……

菊　七五郎の七と五と合した十二を十二と喚ぶかと心付まして……

照　噂に聞た達磨の繡肌を見付け出さうと工夫を凝した甲斐があつて……

菊　漸うの事で見ましたが敵は男

照　適れ手練者

同　如何したのだ仕損じたか

照　醉つて寐たのを僥倖に

菊　刺んとしましたを組敷れ……

照　懷劍はもぎ取られ……

左　却つて這奴の手込にあつたか

菊　イーエ二人を介抱つて何故蟹と付け覘ふと聞ましたので巨細の事を……

同　お話しなされたら如何云ひました

菊　八鬼山始め五人の徒を討取つたには相違は無いが……

照　齋藤先生を討取る抔とは思ひもよらぬ寃の罪だと……

左　其寃罪の證據と云ふは……

同　如何な仔細と云つたのだ……

と問はんとする次の室より何時歸りしか家主の十二が團扇片手に徐々出で來り

十　夫から跡は僕が云ふ……敵で無い證據を立て……

と座に就て一禮なして

十　成程久世川堤に建置ました榜に付て僕を敵とお思ひなさるは尤もです……道理で
すが此お二人にも云ひました通り齋藤先生は非凡の達人譽（罕）の半練磨な劍で討つ
事が出來ませうか事には御恩のある御仁……八鬼山幷に子分の奴輩は怨がある上
彼輩から抵抗するから討もしやうが何で恩ある先生を……只不思議なは八鬼山の
死骸が無くて齋藤樣のお死骸があるのが合點がいかぬ夫でも僕と云ふ此十二を訝し
いと思し召すならイザ首討つて……お心任せに……然し京都大阪大津に建た榜を
見てお二人がお出になつたとは計畫の通りに行つて恭け無い……多分敵は他にあ
らう……と此十二は思ひます……

と云はれて左司馬も鎌治も共に如何樣と思つたか二人ながら刀を下へ置て手を組み

左同ム、

第十六齣

左司馬鎌治の兩人は面壁十二の七五郎が物語に稍疑惑は散じたれど散じ難きは積る怨
みの亡父亡師の讐敵の目途を失し互ひに腕を拱きて思案に暮て默然たり十二は衆を諫
め慰め

十　三人集れば文珠の智惠と云つた俚諺もありますから三人四人が愾寄りて相談した
ら敵を捜す手懸りも有ませう……久々に御夫婦か二組もお揃ひになるは悲しい中
でも歡びでせうから……何は無くても一獻……

と酒肴を命じ盃に時を移して居たる中にも譯別て後の一伍一什を四人は問もし答へも
して聊か鬱を忘れけり該る談話の其中に伊之助が不忠不義を語りて左司馬の憤はるを
十二は聞て膝を進ませ

十　其お話しの伊之助とか稱ふ男は以前八鬼山の門人內で今尾獄と名乘つて居た鯔取
　おやでさいませんか……

と問へば左司馬は少し考へ

左名は何と云つたか知らぬが如何にも八鬼山の弟子でござつた
十 其奴ならば此邊に居ると慥な目的があります
岡 夫では你が御存知か
十 ハイ知つて居りますで……御珍客のお肴に一走り行つて引提て必らず戻つて來ますから酒でも燗してお待下さい
と尻ひつからげて出で行きけり
電光一閃霹靂一聲俄然に降出す白雨は篠を束ねて抛つが如く盆を傾むけて流す如く車軸を流す計りなれば眞葛が原にそよ〳〵と河原に湊ふと唱歌に歌ひし四條の納涼も亂離忽敗白き脛を露わして走る歌妓を見ては久米仙も天から墮落る可く紅ひ匂ふ娘を褰げて轉ぶ齋陽を見ては河童も水から跳り出つべし心天賣は桶を倒し汁粉店は鍋を覆へす慌る混雑の其中か巾着切ひ眞白晝にて這奴の爲には小判が降た樣な雨ぞと歡ぶあり是等も該奴の徒なるべし一人は聾と假名で記せし榜を首に懸た乞食体の男と一人は當時啞の飴賣とて洛中洛外評判の喇叭で兒を喚ぶ商人野士今一人は床見世で按摩を業とす盲の坊該三人は葭簀張の家臺店の蔭に蹲踞つて世間を憚る密々話し啞が低語ば聾が聽く盲も眼を開て懐中から取出したる鏡紙

京の若倒れとはよく云つてある薩摩上布に崑布見た樣な緋縮緬の襟裏白の博多に紫の一本獨鈷の眞入ないで縫無いでユリ〳〵する帶を締て居ても携品のさまを見やがれ曳出しの鎖か眞鍮臺の銀滅金裡には一朱銀二個と二匁内外の小玉銀が一個……
と云へば啞は袂から紙入を出して
有繋は京都の金函だと云われで居るだけ是を見なさい黒華擬の合羽だが裡には二分判で五両二分……大津の米商の雇人のだ……
と云ふ傍から聾が首の袋の底を掻い探り掴み出したる簪四五本
大取りするより小取しろと手當り次第に攫つたが此銀臺に黒いぶしの足に金ヒタドの付てあるのは江戸子らしい御新造が丸髷の根にグイと挿してあつたのこちらの明石珠に銀臺金燒付は大坂の北地の藝妓の所有其餘の品は二束三文盜ら無いよ

りは僂ぐらい正可に無代だから損は無が……悉して見ると河龜が稼高だ

唖 其次は堺徳だ

盲 一番己輩が馬鹿〳〵しい實直に按摩をして居る方が餘程好せ

聾 好なら何でぐれ社會へ加入ないで上下按摩で百文とやつて居ないのだ

唖 不自由な盲の眞似ずるからにや二日に缺ぞ橋下で白い首つ玉にかぢり付て寢ない ぢやうまらないだらうせ

盲 うまら無くてもうまら有ても恁盲で賓込んでしまつた以上は京都ぢや明目では歩行が出來無いアー、明目がけなりいは

聾 俤云つて居ると眞正の盲目の樣で殊勝で好は……處でどうやら霽た樣た目付から無い中に聾にならうか

唖 爾だ〳〵以前の唖と來るか

盲 你方が亦けなりい唖だの聾たのと云つて別に不自由は無い二人ながら生質のかなてこ顔にでろ面だから打つて付けの誂への首だ……巳輩は塞いで歩行かなけりや

ならないから實に不自由な子孫に傳へても盲になるもんぢや無い……モー暗くなつた日が暮るのだらうが

啞 圓山にチラ〳〵灯が見へて來たぜ

聾 河原にも大分店を出して來たモー一稼やらかさうか

盲 素敵に慾ばるねー

聾 ナーニ本業の方をだ

盲 馬鹿を云つて居らア掏摸が本業で菓子行商が附たりだらう

聾 違へ無へ〳〵按摩の伊の都實は今尾の伊之か

啞 益無口を叩いて居ぞと行ふ〳〵

盲 サー行ふ〳〵

聾 己も行ふ〳〵……

と彼誰時の薄暗がり啞のパッパッパッパ盲のピ、ピ、ピー聾は頭の天邊からなしんぞやつて喚き連れ引件れ磧へ行んとするを最前から葭簀の後に委細を立聽く面壁十二

盜人待て……

と大喝一聲猿臂を伸して盲の襟髮鷲摑みにして曳戾せば隙て合圖を爲し置けん彼方此方の物陰より現れ出たる十二の坤漢二十人計は手ン手に得物を提げて追取り圍き

盜人遁らぬ……

とへし抑へ苦も無く犇と縛めたり十二は腰なる扇を廣げ

十　オー皆の者御苦勞〳〵……

第十七齣

古門前町なる面壁の宅には齋藤岡本の兩夫婦が家主十二の皈りを今や〳〵と待居たるに日まさに黃昏ならんとする迄沙汰無く坤漢の輩も一人も皈り來らず如何なしけん儲は前刻の太白雨に降込られて居けるならん抔と喋々喃なし居る所へ酉刻にも垂んとする頃二十名許りの坤漢を引率れ十二は皈り來りしが坤漢の中にて頭立たる某は三人の捕縛者を庭へ拘引來りて倶ある松の幹に繫ぎて去れり十六日の雨後の月新に涼しく木の間をさし昇れるに四人は之を覩れば紛ふべくは無き伊之助も三人の中の一個なり面壁は悠々と浴などなして坤漢の輩の勞を酬ひ酒肴を命じて饌ひなさしめて座敷へ出で來り

十　ヤー大きに失敬致しました一個だけのお約束の下物が思ひも寄らない三個になりましたがサー一獻更めて……

と盃をさしながら

十　昨夕繩手の車道からブラ〳〵川端へ出て來ましたら汁粉商の前の方に床店出して居る盲の按摩が何でも何處かで見た樣だとジッと立て見て居るのを知らぞにソッと眼を開たで訝しい奴だと考へて見ると大垣邊をゴロつき廻つて今尾擬と云つた賊取と白眼んだは相違へ無からうと最前のお話しから思ひ出して抑へに行つたらアノ大雨……餘儀無く暗間を暫時待うと雨舍りをして居る挍實張の前で密語て居ろ三人がたわ○○○這奴はどうでろくで無しと立聞して居ると案の條巾着切の贓の共進會己一恐嚇とよく見たら一人は昨夕の撲擬盲目餘の二人は當三月淸瀧の藪の前で菊枝さんとお照さんとを强姦にしやうとした非人の中での兄株尤も行懸に部家へ

寄うて坤漢の者にも手配りさせて置ましたで何の苦も無く袋の鼠チウーとも云わさないで先此通りです……

と云ふに驚き菊枝は椽の端に進みて熟々看て

菊 エーアノ二人は大坂の千日の墓所で妾を欺騙し高須へ賣つた河内龜と堺徳と稱ふ凶漢でございます……

と云へばお照も膝を前ませ

照 血壁の親分の目の速ひには驚きました妾等は怖氣が先達てア、云ふ目に遭され懸て居ながら顔は認へませんが……

左 何にしても三人とも悪むに餘りある奴だ

岡 迹の二人は罪狀を糺す許りで用事は無いが伊之助には詰問をせないでは……

十 なら無いには金子の行先

左 夫に敵の手懸りも知れるだらう十二殿のお説もありますから

岡 打据へてゞも云わせませう

十 ナーニ卿方のお手を借りませないでも……

と十二は起て庭に下り盲に化たる伊之助を小兒の如く引摑み襟髮捉で提げ來り椽の前へ曳据へて

十 サー眞直に白狀しろ……土山から左司馬さんの路費の金子を携帯して夫から後は如何さらした……云わ無いければ縊殺すぞ……

伊 ハイ申します……五十兩は熱田と岐阜とで登樓に悉皆使用ました

十 夫から如何した

伊 ハイ御出立の其際に萬一路費が無くなつたら何時でも取に來るが好と松島樣が仰しやりましたで大垣へ取に參りました

左 爾して四郎殿は渡されたか

伊 イーエお渡しはでざいません

岡 僅の日子に無くならう筈の無い旅費を如何して盡くなつたと云つたのか

伊 ハイ若旦那が熱田の娼妓に放心して冗費になさりましたと申しました

と聞より左司馬は大いに怒り

左 所持の金子を携帯して逃亡せしさへあるに剰へ拙者が娼妓に惑溺して遊里に浪費したる抔とは重疊の悪くき奴切り刻んでも飽足らない……

とオッ取刀に起んとするを十二は暫時と押留め

十 マー／＼お待ちなされませ一大事の敵の當人を知り得まする端緒を見出す迄は大切な之の伊之助コリヤ伊之助松島樣を欺いて何故金子を奪わなかつた

伊 ハイ悪智嘘言と考付れ御別荘の庭の松へ恰是今夜の樣に踏縛られ氷の如き劍を鳩尾に突當られましたで殘らず白狀致しました

左 夫迄不忠不義の汝をアノ短慮な四郎殿が放免されしが心得ぬ

十 其御不審が敵の本人を……

左 ナニ敵の手懸りとは……

十 追付け判然知れるでせう……伊之助夫から何如致した

伊 白狀したから放免してやらうが命を助けてやる返禮に是非申し付る役目があるそれを為遂て参つたら尚此上に褒美をやると仰やりましたから如何樣な御用向でも務めませうと申しましたら……

左 其役目は如何な事だ……

伊 ハイ若旦那……卿樣を……

左 拙者を……

岡 左司馬君を……

十 どうせよとだ……定めて討てくれいだらう

伊 ハイ／＼左樣でございます……

と此一言に左司馬鎌治鞘枝お照も打驚き暫時言葉も無りけり面壁十二は莞爾と笑つて

十 隠面壁と名を偽り美濃山城と隔てゝは居まするが子分子方は大垣に三十四十はありますから箸の倒た事迄彼地の事は知つて居ますが繼母でも左司馬樣の親公の醜行お聞し申すも本意で無いと今迄云はずに居りました……

と云ふに左司馬も膝を打ち

左如何にも……判りました……

第十八齣

留主安し木華の垣に芭鉈田舎は何家も戸鎖ぬ聖代況てや本年は豐作に二百十日も去年閏に盆前に事無く濟み秋饒かなる美濃の國安八郡今尾の里の村將盡の賤が伏屋へイキセキと皈り來るは廿歳に一つ二つ三つ未滿で鄙にはいと稀なる美麗しき一個の處女綢暖簾を挑げて裡に入り

おッ母さんは何處へ……オー你け小父さん……

と云へば絹莞の火で煙草を吸み居る旅裝の壹人の男

誰だと思つたらお梅坊か大層美しくなつたので見忘れて居た……おッ母は今一寸使に行つた……爾して目下は何處に居るのだ

梅ハイ和田村の阪本さんに居りましたが御隱居さんやお孃さんと一緒に大垣の御別莊へ暫時の間來て居ましたがチト仔細有つてお暇になつて長らく宅に居りましたが你さんの方へ娶いて居ました姉さんが死亡つてからおッ母さんも獨りで淋しがるから爾して居ましたのに當盆前に大垣の齋藤さんから奥にお使いなさる下婢が入るから是非來てくれいと云つて來た人がありましたのでチト宅にもお金子が無くてならない事が有つたとて半季分のお給金をお借り申して參つて居ります……

と云へば該男は嬉しさうに莞爾と笑ひ

ナニ大垣の齋藤へ行つて居ると……假も八鬼山の喧嘩から大垣にも居られ無いで寡夫世帶の氣樂さに到頭京都へ腰を据へて今では面壁の十二と稱つた人入稼業だが……夫ぢや你は菊枝さんに使われたのか……夫に今回齋藤へ行つて居るとは願つても無い僥倖だ……

梅イーエ僥倖ではございません妾は逃て歸りました

十ヱーナニ逃て歸つたとは一体全体どうしたのだ

梅妾が齋藤さんへ上りますと先の旦那の奥樣でお美人と評判のお君樣は未亡人とは眞の假の名目下御師範代をしてござる松島樣の細君同樣白晝日中さへ猥褻な擧動失敬心あるお門人さんは多分お懸壻なさります樣な体裁……夫は妾輩が彼是申し

ますことでございませんがツイ四五日以前からですが細君のお顔にパチ〳〵と腫物が出來たと思つて居ますと夫が楊梅瘡とか云ふ病ひで紫色に總身がなつてどうやら梅毒で昨今は何處とも無しに臭氣がしますと夫と云ふのもお君樣の實母樣は以前島原の花魁でしたから遺傳なされたのでせう松島樣は夫れを厭がりなされてお傍へもお出が無いから悋氣で何處かに情婦でも出來たかどの空想像で半狂亂……底へ困つたのは松島樣が妾を捉て何の躰のと猥らしい事仰やりますが万一と細君のお耳に入つたら喰殺されるかも知れないと思ふと一日も居られないから松島樣がお不在の中におッ母さんが病氣だと云つて一寸歸つて參りました………

と云ふを聞くより膝を打ち

十 夫は愈よ妙だ〳〵

と獨り笑壺に入りながら

十 你は厭でもモー一回齋藤へ歸つて松島の云ふ事を諾と云つて心に順從つてくれ頼むから

梅 エー小父さん……夫は何故に……

十 何故と云つて你がお主の菊枝さんのお爲だからだ

梅 お嬢さんのお爲めとは……

と聞かれて十二は京都にて有し次第を物語り

十 恁云つた樣な譯だから何でも敵は松島と白眼んだ事は睨んで居るが確乎な證據を見屆け無いと敵呼わりが出來無いから

梅 實はお嬢さんを左司馬さんに周旋したも妾ですが又お跡をお慕ひなさつて脱走をなさる其際にも妾がお供をします筈で先へ裏門からお遁し申して妾が行ふと思つて居たが到頭出端を失なつたで疑惑が懸つたを知らないと強情には云張りましたが夫故お暇になりました妾ですから此役目でもしませぬとお嬢さんへ合わす顔がどうもございませんから…… 厭な處を辛抱して屹度實否を糺しませう

十 早速の承諾 辱けない……如才はなからうが迂濶とせないで……

梅 ハイ……夫はよろしいがアノ細君の嫉妬の中で……アーア……殺されはしないと

好か……

十 其樣なに弱氣ぢや安心出來無い……

梅 心を鬼に耐忍しませう

十 夫ぢや賴んだぜ……確乎と

梅 アイ……宜しい……成功ませう……然し万一細君に殺されましたら……どうぞ骨
事を剃枝さん……アノーお孃さんに必らずアし上げて下さいまし

十 ムー面壁の十二だ……云つた事は是が非でも……骨が舍利になつても爲遂るのだ
……況て你の傳言を通じ無いでどうするものか

梅 夫では小父さん行ますからおッ母さんへはおまへさんから

十 合點だ……云つて置く

梅 是が現世のお暇乞かも……

十 エー氣の弱い事云つちや不可よ

梅 デモ……

と見返り振返り結句老母に逢わざるこそ訣別好からんと氣強くも走り出は出でたれど住ば都の片鄙も玉布く家居に勝るなる故鄕を跡に後ろ髮曳れ〳〵て行にける引違へて戾り來る老嫗お緣

アー大きに〳〵遲くなりました不在には誰も來ませなんだか

十 ハイアノ……

と口籠りしが

十 イエ〳〵誰も來ませなんだ……

緣 夫は大きに御苦勞でした……

と云ひつゝお梅が忘れ置し手拭を見て

緣 コリヤお梅のぢやございませんか

十 ナーニ是は……僕の……です京の大丸の仕入だから何處にでもあります……

第十九齣

美濃大垣本町四丁目なる亡宮内が未亡人齋藤きみの身躰に發せし瘖毒は小恙の事なり

と思ひ居しが半月餘りの間に忽ち總身に蔓延りて就中首部の如きは腫脹れて終には一面に膿液出て臭氣は鼻を劈き頭髮は素より眉睫迄も脱落て今は癩と云わんより寧ろ瀬と名を下すべき病狀とはなりぬ夫の顏の厭ふべきは羽生村の累に四谷のお岩を混淆して般若寺村にやりたらば恪ならんと思われる程なれば一目見て嘔吐き二目見て魘死すべし假令嘔吐かぞ魘死せぞとも眼を閉ぢ鼻を押へて迯げさるを得ざる許りなれば然らぬだに松島四郎は倘綻びかゝるお梅が深き色香に春の心の動き移りて既に萎れ初しお君が容貌に秋風起し折柄なれば一室に打臥せし儘看病做ざゝるは勿論にて傍へも近寄らざれば彌よ心ひがみ益す氣狂ひて一種稀代の神經病を發したり其病狀は如何にと尋ぬるに交代に人を傍に侍しめて其人の手を握り居らされバ寢眠に就く事を得ぞ故に三人の下婢も二人は病と詐り稱して實家に辭り去りて今はお梅一個而已ぞ殘れり恪ては四郎も最愛のお梅を我が身近く置く事を得ざれば新に下婢を雇入んと當地は更なり近郷近村へ下婢を聘入ん事を普く云ひ步行せけるを聞傳へて毎日三人五人と目見得に來れど彼の累お岩混淆の病婦に手を握らるゝの一大難役の事なれば一日と居るは稀にして一時か二時にて直ちに迯歸り去るを例とせり四郎は之に困じ果居たるもお梅は結句四郎が添寢するよりは優ならんと看病懈怠なかりける然れども恪ては十二の七五郎より依賴れたる古主に關係る一大事を探索の期無るべしとお君が厠に入りたる間を窃みて四郎に對ひ

梅 妾一人恪てあらば到底も一命も永續ざるべしあわれ二三の侍婢を傭ひ入れてたゞ……

と怨じければ四郎は一の妙案を考へ出し俗に癩病村と稱する邊に住居て該ろ病者を介抱せし人に過分の給料を出して召抱んと云ひ遣しければ召募に應じて來れる三四名の婦人は有繫に辭熟て習慣は性質となり居れば汚穢を汚穢とも思はぞ看病を爲して假令妖怪に手を握らるゝも慾と首引元來承知と耐忍して該三四名が交代にお君が傍に侍し居れば四郎は稽古の餘暇晝夜の差別無くお梅〳〵と放し得ぞ誰彈からぞ寵愛しける初めの程は打續きての看病にてお梅もこよ無く勞れたれば休息ありと云ひ置きたれど何時しかお君の耳に入り聽知りたるを覺しきが今般は不審くも妬しき事を云はぞ偖はお

君も已が姿の醜くなりしを知りて心に愧ぢて慾はなりしならんと云ひ居れり慾お君が嫉妬めきたる所爲なければお梅も又心安んじ藥石の周旋をもなし居たり今日は昨夜より秋雨の降頻りて小歇もせぞ四郎は道場に出て教授をなし居ればお梅は四郎の居室の掃除せんと箒執りて在しが三室許り隔たりけるお君の病室より

お梅……お梅……

と喚ふはお君の聲なり例の看病婦は如何なしけん傍に居らさるかと不審しながら

梅 ハイ……只今參ります

と病床に到りて

梅 お虎どんは何處へ參りました何ぞ御用でございますか……お煎藥は前刻召上りまして間がございませんから尚少しお早いでございませう……お塗り藥を致しませうか……大分お顏の腫れが引ました……精々とお藥をお用ひなされましたら不日御全快なされませう……

と云ふ顏を熟視て彼の怪物も彷彿と云ふ顏で莞爾笑つて

君 モー氣休めはお止よ到底全癒はならないよ

梅 其樣なお氣の弱い事を仰やりますな他の御病氣と違ひますから瘡毒が癒りさへしましたらナーニ直と御全快でございます

君 瘡毒が治癒つても以前の顏にはなりやしないだらうよそれぢや治癒らないのも同じ事だよ……だから寧死にたく思つてるよ……一日も早く……

梅 奥樣……何を仰やります……其樣な事を仰やりますと妾は勿論でございますがお虎始め此度上りました四人が精を落します何でも一生懸命で御全快をなさせませうと思つて居りますのに……第一に旦那樣がイヤ松島樣かお力を落し遊ばしますで……

君 虚言……虚言々々を云つちや不可よ松島樣は妾の死ぬのを待つてお出だよ

梅 何の其樣な事が……

君 デモ妾はどうして居るかとも云つておくんなさら無いから心細くつて〱……夫で便り無いからツイ他人の手を握つたのが癖になつたのだよ……妾も不日に死ぬ。

から汝の手も久々で握らしておくれよ後生だから……
と云われてお梅は底氣味わるげれど否とも逍に云ひ兼て傍に寄れば手を出してツーと
にぎり
君　アー好い手だ和らつかくて……次手だから膚を弄らして……ナニくすぐつたい事
が……可愛らしい好い乳豆だ……之の肌の和〳〵とした事……若い人の肌は何と
無くムチ〳〵として好いねー實に譬にも云つた通り搗立の餅の樣だと眞實に爾だ
……妾も今一回恁云ふヤワ〳〵とした肌になりたい……十七八に爾なつたら松島
樣にも厭がられはしないだらうに……アーア……此肌のヤワ〳〵した工合では……
……此乳豆の可愛らしい工合では……アーア松島樣が可愛がりなさるも無理ぢや無
いね！
と莞爾と笑ひし怖しさ思はずお梅は振放し飛退つて慄ひ居たり

第二十齣

憂氣の障りか雪の中毒か庭の梢に白妙の花咲く氣色も懶しと見もせで今朝も床の裡起
もやらねば寐もせぬ胸の痞を枕の角に當て押へる之の癪は口惜さつらさ悲しさの積り
せ出し病症とも知らぬか今日は一六の休業なりとて昨日より來りて皈へらぬ松島四郎
椽の上に寐匍匐つて莨を燻らし
松　コレお梅……何をして居るのだ寒いのに寐間着の儘で……風邪でも感冒たら悪い
サー夜着の裡へ這入ら無いか……
小夜着の袖を擡げてやれば
梅　ハイ……物態無いどうぞ爾してお置下さい妾が適宜に這入りますから
松　夫の適宜が判ら無い全体你は……
梅　ハイ亦例もの癪が鳩尾へ差込みますので
松　ア、夫は困つた叉しても〳〵癪〳〵で……實は先般お君奴が你の手を握つて何ん
だか厭身つたらしい事を云つたと云ふ事たから到底も是ぢや一緒には住ないと云
つたのでお君の前は体よく親の病氣だと云わせて暇をとらせ久しく鎖てあつた此
別莊へ囲つて置て小婢の一人も使つて恷して居たら何も不自由も氣兼も無いだら

うと思つて居るのに相も變らず癪だとか云われて見ると僕が立つ目が無い……何が尚氣に入らないのだ……

と云へばお梅散涙聲で

梅　後生でございますから妾はどうぞ……

松　何だと……

梅　お暇が戴きたうございます愆アしましたら何が不足だとお尋ねでせうが妾は身分に餘つた卿の御對遇ですで此御恩は忘れませぬが……假令死ましても……ですが妾は奥様が手を握つて仰やいました御言葉が未だに耳に付きアノ恐しいお顔で莞爾お笑ひなさつたお顔が未だに目に付きどうしましても忘れられませぬで怖くつて〳〵なりませんから……思つて見ますと奥様に母が病氣だ抔と詐言を云つて下つた顔をして此御別莊に愆して居る事をお聞なさいましたら大變でせうと思ひますと……アー罪な事だアー濟ない事だと……夫よりは今の中にお暇を戴きますがよろしい……と思つて見て今日其事を申出しませうか明日申出しませうかと思ひ〳〵ツイ〳〵一月餘りも愆して居ります……と云ふのもどう考へて見ましても妾わ卿とは迚も三日と……

松　ム、何だ……

梅　サ三日とお目に懸ら無くては居られませんから實宅へ皈りましたら何れ戀慕れ死に死んぢまいませう……と思ひます……と云つて一日送りにして居ます中に奥様が御聞なさつたら此處へお暴行れ込みなさいますに違ひはございませんよ……アノ妖怪の樣なお顔で……アノ餓鬼の樣なお足で……お出なすつたらどうしませう妾は……

松　何……馬鹿な……誰が云ふものかお君に……お虎かお幾かお粂かだらうよ彼奴輩なら鼻藥が遣つてあるから大丈夫だよ……滅多に云ひやしないよ

梅　イーエ夫は思召が違つてますよ……何故つたら卿が一兩のお金子を遣さいますと奥様は二兩も下さつてお尋ねなさるから皆云つてしまいますわな……元來が慾許りで上つて居ます人輩ですものを……ですから奥樣が現世にお存命なさります限

りは到底も安心して卿と患して居る事は出來ないですよだからお暇を戯いて下りますと決定ましたが………

とがの一字を云つた儘で涙をパラ〳〵と膝に溢して脊を背け差俯くを四郎は寐ながら顔を覗き脊を撫て

松　マー〳〵お梅何も泣くには及ばないわねーお君もモー永くは存命て居ぬから

傳　何の其樣な事がありますものか御病氣と云つたつて癩毒ですからお一命には別條はございませんわねー奥樣の母公樣と申すのもア丶云ふ御病氣で七年とか存命て居らしつたと云ふ事ですもの漸う百日餘りにしかおなりなさらないのがどうして〳〵

松　ナーニモー二三日に中にはどうかするは

傳　どうかすると仰やりますの旦……

松　片付けちまうのだ……サー駭くには及ばない……殺しちまうのだ

傳　エー……アノ奥樣を……罪も無いのに……

松　イーヤ罪がある

傳　どう云ふ罪か

松　罪も〳〵大罪人だ

傳　エ丶エー

松　必らず他人に云つちや不可ぞ……お君は宮内が存命中から拙者に懸想して宮内を拙者に殺させたのだ

傳　エー本當でございますか

松　殺した當人が云つて居るの虚言があるものか……爾して置て今亦一子の左司馬を殺してしまつてくれろと伊之助と稱つた家來に云ひ付けて左司馬の迹を見にやつた……此樣な恐しひ婦人だから如彼難病を煩つたのだ實母からの傳尸病で癩毒だと云つて居るがどうも癩病らしい癩病は天刑病と云つて罪を天が罰するのだ拙者もお君の心底がそら恐しいから一室へ押込めて在るのだが宮内を殺した事を知つて居るのは這奴と拙者だけだが婦人と云ふものは嫉妬の爲には前後を覺へぬなる

のは多分ある事だ何時誰に云ふまいものでも無い……敵を達磨の七五郎の所爲にしてあるのを……眞實の事と……して見ると枕を高くして寢て居られないからだお君さへ片付てしまつたら你れ本妻だ……誰に遠慮が入るものか……だからモー二三日忍耐するが好……

樺　二三日や五日や十日にめかりはでざいません……奥樣さへお出なさらなくなつたら……爾して宮内樣の敵を七五郎が罪になすつたのは

松　ナーニ別に子細は無い達磨が殺した八鬼山の死骸を川へ投込で拙者が殺した宮内の死骸を引ぞつて行つて五人とある員數に合して置たのだ

樺　ヨーマー劍道の達人で人が恐るゝ宮内樣を物の見事にお討なさつたねー

松　欺すに手無しだ釣に餘念の無い處を後ろから大袈裟に斫り付たが迫は宮内だ拙者の股を斬付た……だが初太刀の重創に腕が撓んだか眞の些細なかすり疵だつたから疊み掛て切倒したのだ鬼と名乘つた宮内さへ僅壹討に殺した此の四郎も你の爲にはアーア左りを刺れた……アー你は拙者の命取りだな——

第二十一齣

草木も眠る人定時刻京都知恩院舊門前の面壁十二の宅の脊戸の薪納屋の前へ日沒後に出入の炭商から持込んで立懸て去んだ日向の大俵の炭が不思議やウゴ〱と動き出し裡から手が二本出て堅繩を放解たかと思へば口に當てある木の葉の付た杖をグーと突出して現れたは一人の男で夜目と粉炭に面体が汚れてあるから確乎に夫と見へ判ぬが納屋を覗きて

伊之公……伊之的……どうして居るのだ……

と低音で云へバ裡からも小聲で

河内か……龜兄か……能く來てくれた……腕を縛られて居るから詮方が無へ

河　一寸待ねへ……巳が扉を開るから……錠があるが

伊　ムヽ有るが空錠だ……グッと押たら開くだらう……握り飯を持て來てくれる際に錠は持て來ないから

河　成程……開た……

と狸に入り縛られて居る伊之助の繩を解ながら

龜 どうした〳〵……アレから……

伊 どうつて七五郎は大垣へ行つたと見へる……七五郎が皈つて來る迄息して置くのだと又問ふ事があるか知れねへからだと……好い面の皮だ……厄介な御難だつた

能く茲に來られたつけ……時にどうした

狸 巳も徳も子分の輩が散々つぱら打擲りやァがつてトヽの結局がよく出來て居らァ汝輩二個は生して置くのだ無へが殺してやるのも懸然だから放免してやるつと……己來屹度心を交換て惡事はせないと云へと云やァがつて投り出されて夫がお仕舞だ己輩二人助つたからつて朋輩の汝が此樣な目に遭つて居るのに捨て置ては明友甲斐が無へと思つてるだらうとどうか救ひ出す工夫が〳〵と考へて居たが面壁や左司馬や錬治が居るから迂濶な事は出來無へわね—……すると待てば甘露で……七五郎は大垣へ行つちまう……二人は墓詣に紀州へ行つたから到底三四日は皈ら無へと聞たので夫れで……

伊 兄分……有難へ……實に濟ねへ……種々な心配掛て……だが脊戸口をコヂ開て這入つたのか……何處から出て來たのだ

龜 何處だつて正成も其處退去と云ふ知恵を考へ出して炭俵に化てやつて來たのだ

伊 何たとへ……炭俵に……全体一体どうして

龜 ニ、當家へ炭や薪を賣り込む家に居る傭人は己が河内に居た時分に近隣の奴で小賭博の一つも奕つた朋輩だつたが巳輩が對側の物入に縛られて居たら薪を擔ぎ込んで來て不圖顔を見て吃驚りして居つたつけが該薪商を捜し歩行いて漸とで知れて逢つたから當家の摸樣も詳く判つたが加之工風を凝して炭俵へ潛り込で舁擔込んで貰つて夫でマー〳〵斯云ふ都合に出來たんた

伊 そりや尽力だつたらう……徳はどうした

狸 一個己許だや氣遣ひだと此塀の外に待つて居る筈だ……屎汲が出這入する切戸が有るぢや無へか……何處か納屋の横とかに……薪商に居る兀熊が云つて居たぜ

伊 ムゝ……何でもある筈だ……目付ら無へ中に行くべいか

堺　剛だ〳〵行くべし〳〵
と両人は抜足差足伊之助は豫て仕馴し暗捜しに闇所を歩行み行く河内龜は思はぬ知らぬ伊之助の足を踏めば痛さに吃驚り
伊　アヽ痛……
と云へば
龜　何處が開た……
と鉄拳
伊　何かな。○。○。○てこの眞似して居るか……
と大胆不敵に笑ひ興じ手探り當りし切扉の鎹樞を外す上る音に戸外に佇立む堺徳が
龜　さんか……伊之助は……
伊　ム、同伴た
堺　其處へ行く
と切扉を潜り出んとするを最前より窺ひ居し一個の婦人が隠し持つたる鉄網行燈へ覆ひし袖を曳除ればパッとさしたる燈の光り見咎められては面倒と堺徳が豫て用意の腰の一刀抜くより早く飛込んで斬付ればアーと魂切る聲三人は一齊に
迯ろ〳〵……

和泉の國岸和田は岡部侯居城の地にして押照の浪華よりあさもよし紀の國に通ふ官道にて往き來ふ人も多かる中を南へ歩行み來る旅粧ひせし二人の武士は齋藤左司馬と岡本鎌治なり
岡　故郷は忘じ難しと云ひますが堺は故郷と云ふでもござらぬが暫時寓居をして居つて見ると通り流しにしても何と無く過去を忍ばるゝもんですね―左司馬君……
左　如何にも爾で……拙者が亡父と和歌山を退去致したは六歳だつたから夢の様で判然と覺へ無い位だが今度貴公と態して墓參旁々仝地へ罷越すと思ふと只管懐しい氣がする樣で之れに就ても實母の事を思ひ出すのは存生で居られて目下の母さへ迎られなかつたら如彼非期の御死去もなさるまいにと思ふとツイ〳〵落涙を催升
岡　其お歎きも實に道理です……落涙と云へば昨夜甚だ不吉夢を見ました眼が覺たら

枕紙か濡る許りに涙で濡て居ましたで大きに心懸りで……

左 夫は如何云ふ夢を……●

岡 イエ馬鹿しい〳〵事ですか愚妻か右の肩先から左の肋へ掛て斬られ鮮血淋々となつた姿で拙者の寢て居るのを呼覺す處を見たのです……と云ひなから礫に蹶き草鞋の紐をプツヽリ切斷ば

左 アー如何なさつた

岡 ハイ……負傷は致さないですか草鞋の紐か根から……エヽ何だか縁起の惡りい

折柄啼行く鳥迄か自ら歎聲を發して

鳴呼〳〵〳〵〳〵

第二十二齣

大垣本町四丁目故齊藤氏の寡婦お君が類似瀬病の毒も追次難症に傾き果は神經錯亂して種々の譫を口走り或は猛り或は狂ひ抔なしけるにより看護の爲は素より一家内殆ど困じ居たるに如何なる急症や發しけん頓に死しなり然るに該死相を見るに兩眼をクワツと開きて凄じき許りに睨み齒をグツと嚙しめて怖しき程に切ばり双手は空を摑み二足は指を屈め然らぬだに肉頽れ皮爛れ看るも厭せき姿なるに恁る怨恐の容貌を現し誰近寄る徒も無きが故か松島四郎は甲斐〳〵しく頃來病中に疎かりしに反對へ最正直に自から沐浴納棺をもなしたるぞ殊勝氣にこそ見へたり從前のお君が醜行と病中の横恣とに爪彈きしてお君の死を吊悼み悲歎くもの丶一人も無きぞ淺ましくも又うたてけれ恁て有るべきにあらざれば某の院に葬式をぞ做し畢りぬ迹には近隣の人々が寄集い居れど彼の俚諺に云ふ親族は泣寄り他人は喰寄り其泣寄は一人も無く徒食よりの人而已なれば精進料理のしあげの膳部に頂戴しませうの御返盃のお交換の仰せに隨つての失敬ながらのと酌つ飲へつお平の長芋が結構で候の刻和布と揚豆麩は必ぞ喫るもので候のと云つたり喰つたり御隨意にとの挨拶をも待ぞ〳〵イ自由にと自酌自盛膳を据れば腰も据へ醉がまわると舌はまわらぬ稀にお弁茶羅が

アー奥樣はアノ美麗お顏だつたにアノ醜惡い瘡毒の爲にお死亡なさるとは痛歎しくて〳〵

と泣く上戸あれば

馬鹿〳〵しいやなー先生が御存命時分から半田楽を据膳とやらかして息子どんに剝付られ加之に息子どんが別荘へ逃出したら迹を追駈　送り膳之れも箸を取つてくれないから……此後は御遠慮申して云わ無いで置くが實に言語同断傍若無人と云つたら此佛様だ夫においとしぼしいだ……糞があきれらア……おいとしぼしや梅干がて聞てあきれらア赤蛙の乾干なら疳の良藥だ……胡麻も休み〳〵摺つて置くが好やなー……爾胡麻が摺たくば臺所へ行つて混和膾でも手傳ふが好い……とヱツタクレ奴が……

と怒り上戸が罵るを聞てこれは可笑い

ハヽヽヽ佛様がおいとしぼしいと云つた人も可笑しけりや夫を胡麻摺ると云つた人も可笑いは……ハヽヽヽどうでも好ぢやないかアー云ふ病氣で早く云つたら婆娑塞げィャ遲く云つても婆娑塞げの奥様が何々信女と改名なさつたら……マア〳〵お目出度いのだハヽヽヽ恁して御馳走になつて居たら夫で好いぢやないか……泣くにも怒るにも至らぬ事ぢやハヽヽヽ

と笑い上戸の高聲に反對へ片偶に鼻突合して耳こすり合つて甲乙丙が閑話密語

甲どうも尋常一様の死に様だ無いぜアノ死体では

乙ムー何でも首を縊たのだと云ふ評判がある……松島先生が自分で沐浴も納棺もなすつたのだから判然と見たものが無いから云われないが首の廻りに細帯か何かでグーとやらかした痕があると云ふ事だぜ

丙誰がしたのだらう……

乙知れた事だ……松……印だらうよ別荘にアー云ふ幻妻が圍つてあるのをアノ妖怪が恐しく嫉妬と云ふ事だから

丙爾かも知れねー……何でも昨日の曉にキヤーと云ふた聲がしたと看病婦のお虎が云つて居た

甲何時に無い今晩は拙者が看病をするからと宵から松島先生が傍に居て侍婢は寐さしてしまつたと云ふのがどうも變だぜ

乙 變と云へは松島先生の右の小指が白木綿で卷て結いてあるがチト短つかく見へる
は如何したんだらう
丙 正可……お梅坊に切斷て遣つたのでもあるまへ
甲 サアどうだか……變と云へば尙一つ變があるせ
乙 何だ／＼
丙 どんな事だ／＼
甲 他ぢや無いが昨日から佐吉とお島が居無いせ……どうしたら此遽しい中で……
乙 佐吉は若旦那の左司馬さんへ報知に行つたと松島先生が云つてなさつた
甲 敵討に出て何處に居なさるか目的も無い左司馬さんへ使に行つたのが不思議だ……
……だが佐吉は爾としてもお島は……
丙 お島か……お島は妹か病氣とかで實家へ行つたと
甲 死人のある中で何ぼ何でも……格外訝しいせ
乙 フーン

丙 爾だなー……
甲 己ば不圖變だと思つたら氣の所爲か知らないが何も彼も變に見へて……不思議に
見へて耐へられない
丙 他に變な事か
乙 何か尙あるか
甲 有るとも／＼大有りだ
乙 ハーン
丙 ヘーン
甲 庭の井戸ねー
乙 ムーアノ築山の後の……
丙 松の樹の傍にある
甲 アノ／＼……アノー井戸の水か眞赤で……
乙 エー何だと……水が眞赤で……

甲 血腥さいせ
丙 血腥さい……エー眞實か
甲 何たへ……ビリ〳〵と……氣の弱い……戰つて居らア
乙 詮方か無へ臆病神だ……
甲 と……云つてる伜は何た……汁椀の盞へ酒を酌で居る手かガタ〳〵なつて居るだ
無いか……アー溢れる〳〵
乙 デモ……獨ビリ〳〵……と手か戰う……の……だ……

第二十三齣

鉢飲酒の猩々酌に歌へ踊れの亂痴奇騒ぎは明日出帆の千鰯商の荷主……陀々羅大盡が送別會爪彈の水調子に心意氣の百々逸節け伜の爲なら轉廓にでもとの絃妓と對座の自稱丹治郎が眞猫醂……金子費浪にきれはなれよきは庖丁鍛冶の職工に無暗にぽんつくは鳥銃商の備八一休禪師然と娼妓買に本來は無一物と大悟して家資分散迄來る腥臭坊主天川屋儀平乎として妓の爲に妻子を離別する音便の俠に似而非なる狂客該る人々のうかれ遊廓に名も高須の一二を競ふ屈指の翠臺万春樓の奥座敷の廣室にさんざめく大一座三絃のシヤ〳〵シヤン大皷のテン〳〵皷のタポヽン笛のヒユ〳〵ヒユー皷弓キユー〳〵舞踏のトコトンイヤーの掛聲はヨーイと和し洋々の賞贊は親爺洲々に歴す十八九名の藝妓舞妓幇間乾婆が繞圍く一個の客は紀州湯淺の醬油商有田屋の主人勇三郎と稱へる二十三四歳の好男子敵娼は目下全盛の花魁八重咲なり之の大盡の寛活豪遊びも何時じかハイお便所なら此方でございますとの乾婆の言語を好機會にさわぎ歌にて道具ぶんまわせば四疊半の離れの小室に屛風を立廻し絹の三裴褥に仝じ夜着夕霧亘燵に松山枕の飾り付よろしくしんみりとした合方にて道具おさまると演劇の臺帳なら記すなるべし該屛風の外には乾婆●○が衣服を疊みながら

●八重咲さんは嘸本望でせう……思つてお出なすつた通りに有田屋さんの旦那がお落籍せなさる事に決つたので……

○從前度々落籍をしやう〳〵とお云ひなすつたお客さんもあつたが八重咲さんは謝絶ばかり云つてお出であつたが當春アノ旦那がお出になつて初會の晩から妾はし

みぐくアノ旦那が好で……と云ふと初會惚して十五や十六の雛娼の樣だとお笑ひかも知れぬがどうぞくく長がく來て下さる樣にしたいとながくのがくに力を入てお云ひなすつて……

●爾でしたねー……末始終は素より本妻にはならなくても權妻にでもなつたら翌日死んでもかまわないと流連なすつてお出の際に手水を遣つてお出なすつて旦那が入らつしやらぬ間にお云ひなすつたが到頭今度は……

○サー夫もお留主居さんか是非落籍するとお云ひなさる……當樓でも他ならない紀州樣のお邸の事だから八重咲さんの例の氣儘も諾と許りに聞ても居なさるまいし……八重の戸さんなり八重菊さんなり妹娼さんか先緣く前へお落籍なさるもんだから尙更の事で……既の事で明日とか明後日とかに約定金とかゝ這入る處でした恰是旦那さんが今日お入來になつたのでお話しをなすつたら速刻に約定金を二百両お渡しになつたからモー大丈夫ですよ

●爾してお落籍なさるのは正月上旬ですと……實にお僥倖ですね1八重咲さんは……

……先づ第一に旦那のお宅は湯淺では一と云つたら二の無いお宅ですから金子があるのは云わ無いでもですし夫に奥樣はあつても番頭さんの娘さんをこしらへどりでお貰ひなすつたのですから悋氣抔は爐にも出來無いさうですし……旦那は一年の中で六七箇月は大阪にお出なさるのだから何れ大阪へお妾宅か出來るのでせうし……男か好てほどがよくつて入つしやるのだから

○之で不滿足をお云ひなさつたら罰か當ます

●何か八重咲さんは不滿足にお思ひなさいませう……アノお留守居さんの吝嗇では

○どか惡くて妻大明神とも云ふ程に御重役のお孃さん風を吹せなさる評判の奥樣のあるお宅へ御一緒にお住居なさつて……加之も黑痘痕の鬚面と云ふ樣な優しいのならよいが髭の中に顔があるから面髭と云つても可のとはお月樣と泥龜程も懸隔て居ますものを……

抔と問ぞ談話を爲すも屛風の裡に勇三郎が臥し居るを目的に御樞頭に有付んと欲するの計畫なるべし勇三郎も通人粹士と自ら任ぞる豪商の主人有繫に聞流しにも出來ぬか

屏風の裡から

勇アーコレ誰か居る……お鶴か……お龜か……白湯を一杯酌でくれ……然して誰か一人來て巨燵か格外熱いから火を埋てくれ……

と云ふを聞くより両人はそりやこそ旦那かお召なさると口で云わねど所作にて聞かせ

つて庭掃く對迎にて

○ハイ〳〵お酌みナしませう……少しお熱い樣でございます水でも少し加入ませうか……

●火はコッボリと埋めましたが何なら藁灰を焼かせまして切炭の上から置ませうか

と云へば勇三郎は寐ながら枕邊の紙入を取つて、

勇アー浴もそれでよろしい……巨燵も結搆……オヽ御苦勞〳〵

と二分判を壹個宛撮んてやれば

○これは旦那

●大きに毎度

●有難う……

折節飛石の上に駒下駄の音カラン〳〵○●は屏風を片寄せ椽の障子を開けて

●太夫さん……

○サーお這入り……

第二十四齣

一村時雨霽行て雲間を洩るゝ下弦の月何某の院の墓原に密々〳〵と低語は大垣藩の捕亡吏の部下の輩

甲本町四丁目の荒物商桐原屋方吉が密告で見ると……

乙齊藤の寡婦の死去の一件が何分怪しいとの事だから現場へ出張したが死体を堀出すよりは他に詮方が無からう

丙爾だとも〳〵小田原評定をして居た處が果しが付ない

丁倘々玆をしまつてから齊藤の庭の井戸も調査に掛るのだから

甲彼是云つて居るよりは正のものを正で撿めるが早いが……

乙 が……どうした
丙 どうもせないが堀出すのがチト……だらう
丁 お察しの通りだらうよ
甲 マー〳〵其様なもんだ……處が段々夜が更る腹が減る酒が飲たくなる……だから毖しやうか
乙 それが好らう
丙 如何にも
丁 御道理……
甲 何だ……氣が早い尚云つてやしない……甲乙と云つて居やうより總係りでやらう
乙 拙者は御免だ……
丙 我等は一寸便所へ……
丁 今夜は少し心急ぎだからお先へ……
甲 ア、爾逃腰で困るだないか

乙 デモ……生て居つた時分から妖怪だ〳〵と云ひ觸した齋藤の寡婦の死顔がどうして……
丙 加之も眼を剝て……
丁 歯を切ばつて……
甲 ナーニ夫も人の噂だから……だがどうだか知れたものか……サー夫ぢや一番鎗ぢや無い一番鍬をしやう
丙 モ！百年目だ手ん手に鍬など鋤など持べし〳〵だ
丁 是が鍬〳〵と云ふのだらう
甲 怖〳〵と云ふ酒落か墓々しい
乙 馬鹿〳〵しい……かこじつ〳〵
丙 サー〳〵棺へ鋤が届いた
丁 蓋をこぢ開て死体を出さうか
甲 ナーニ出さなくてもだ……首の廻りの細帯の痕さへ見たら夫で好のだ

乙 イヤ小指の一件があるから口の中を見ろと云つ付られたぢや無いか

丙 成程噛切斷たと云ふ考へは感心た

丁 鋤を両方から入れて

甲 オッと……合點〱

乙 ア、臭い〱膿の香が合併して居るから

丙 鼻を撮んで居ては手に力が入らない暫時の耐忍だ

丁 ソーレ開た〱

甲 ヤー提灯を……何だ……此目……此口……

乙 恐しい面だ

丙 成程……首の廻りの痕は細帶に違い無い

丁 口の中だか悉……歯を噛〆て居ては詮方が無い

甲 小柄でも突込んで引開るが好せ

乙 グーと遠慮無しに相手は死人だ

丙 少し開たぜ……覗いた〱

丁 提灯の燈を……

甲 アー暗い……蠟燭の心を剪たり

乙 オッと來たり

丙 モー少し開けたり

丁 モーいけねへ……素敵に噛でるから

甲 好い〱見へた……糸切歯で噛で居るのが小指だ

乙 そいつは豪氣だ〱證據が認つた

丙 どうしやうかモー埋るか

丁 素よりだ〱

甲 サー土だ……早く

乙 棺の釘は……

丙 ナーニ好らう……其儘で

丁 知れた事だ……跡へ紙花を建るのを忘れちや不可せ……

甲 樒は好か……以前の通りに……

乙 塔婆は何處だ……眞中か

丙 水の茶碗の中へ葉か一枚入れて有たせ

丁 底迄御丁寧にせぞとめた……

甲 アー隱亡も容易にや出來無い

乙 ヤン〳〵……尚臭味か鼻に付てるせ

丙 睨んで居た顔が目前にあるやうだ

丁 歯を固く喰しばつて居た顔もだせ……

甲 然し指の一件は好としたが今回は井戸の一件だがどうしやう

乙 サー一寸案が付ない

丙 案が付ないなら豆の粉が好せ……

丁 エーまぜつ返しちや不可い……

甲 誰か木登りは出來無いか

乙 木登りだ……何にするのだ

丙 子供の時分に柿の木へ登つた事がおるからやれない事も有るめへ……と思つてる

丁 と思つてるぢや不安心だ……全体一体何だ〳〵

甲 頃來齋藤の庭へ植木屋が這入つて居ると云ふ事だから誰が植木屋に扮つて入込で煙草の間にでも井戸の穿鑿をしやうと云ふ考へだがどうだらう

乙 妙考〳〵拙者がやらう木の上で鋏で以てチヨキ〳〵とやらかして居て……

丙 夫は好が枝を踏外して久米仙をやらかすか

丁 婦人の脛の白きを見たなら好が死人の面の怖さを見てはくだらないせ

甲 ナーニ植木屋へは內々で含して置から強て木の上に居ぞともよろしいが正可にマ〳〵しても居られまいから邂逅には木へも登らないでは不可と思づたら聞て見たのだ……ぢや……貴公は植木屋になつて行くとして其御用は下男と下女と都合二人の踪跡が知れ無いのは全く松島四郎が殺害したのだらうと云ふの見込だ……

夫は看病婦を一人引致て尋問して見たら仝夜は四郎一人病人の傍に居つた趣きだ處が夜明前に病人の聲がキヤーと云つたさうだすると下男と下女とが驚いて走つて往たがされも人殺しとかお助け下さいとか大聲を揚た迄の証跡は付てあるだから……

乙では……二人の死骸が井戸の中にあらうと云ふのか……

甲如何にも……

乙何様……夫で水が眞赤い……判りました……

丙ヤー亦降て來た……

皆行う／＼……

第二十五齣

面壁十二の七五郎は曩日に齋藤宮内が怨敵は豫知の如く松島四郎なるや否やを視察探索の爲に密に大垣へ下り亡妻の實家の方へ到りしに不圖も亡妻の妹お梅が齋藤家の下婢と雇われ四郎が彼を眷戀するの趣きを聞たるより仝人が舊主の女主菊枝に盡す忠節

の一端なるを敵へ諭し假に四郎の意に諂順ひ實否を確めくれよと申し含めて去り皈らしめて滯留せしが爾后お梅は該事件に而已慮を凝せし甲斐ありて四郎は自白宮内を殺害せし所休且不日お君をも故殺さんと云ひたるを報知せしにより雀躍なして悦ひ勇みて京師に皈れり其不在中に不慮の出來事あり夫は彼炭納屋に生擒となして繋ぎ置たりし伊之助を救ひ出さんと窃に忍び入りし堺德河内龜等の三人の爲に岡本鎌治の妻お照は重傷を負ひ遂に療養藥石も其効無く黄泉の客となりたる一條にて當時は鎌治も左司馬が墓參に仝行して和歌山に赴むきて居らざれば留守なす子分の甲乙が心配弱枝が悲歎や容易ならず兎角なす中に左司馬鎌治も歸り來りて葬式の營みをもなしたれども彼許の締を七五郎に通知せ愚かさんも如何なりと制止置きたれば七五郎は更らに知らず歸りて之を聽て驚き悼みしが惡る嘆きの中の喜びは宮内が怨敵の判然したるの一事なれば急ぎ準備とり〲にて左司馬夫婦鎌治七五郎の四人は京都島門前町の面壁が宅にて出發の交盃をなして發足せしが第五日目の黄昏に美濃の國加納の驛に着て某旅籠屋に宿泊り翌日未明より七五郎一個今尾に到り例のお梅が老母の門を窺へば何と無く

悄然と物淋しけれど不在とも見へねば他見を憚る深菅笠を戴きし儘にてズーと這入る

七 老媼さん……在宅かねー……

と云ふより老媼は走り出

老 オヽ七五郎さんか……よく來て下さつたねー……早速に……

七五郎は何が早速だか不了解なりに艸鞋の紐を放解て上へ發り

七 早速とは……媼さんどうしたのだ

老 何と云つてお梅が行つてしまいました

七 エー何だと……お梅さんが行つたと……一体全体何處へ……

老 何處だつて拘引られて……牢獄へ……

七 ナニ牢獄へ……どうして

老 七五郎さん……你は何も知ら無いで

七 知ら無いでとは何を……

老 サーお聞なさい……お梅が參つて居ました齋藤さんに大騒動が興りまして……

七 フヽン……騒動とは

老 齋藤さんにでざる松島さんとか稱ふ先生は人殺しの罪があるつてお領主から召捕に行つたさうです

七 ム、夫では宮内様を殺害したのが發覺で……

老 イーエ爾で無……齋藤の寡婦と下婢と下僕と都合三人を殺したのが……

七 アノ寡婦を……

老 何でも病氣で寐て居やしやるを縊殺したさうですが該騒動を何だらうと走つて行つた二個の傭人をも喋言かと思つたか是をも速座へ切殺して死骸は庭の井戸へ沈めて置たのが何から知つたか捕亡吏が植木業となつて入り込んで居て加之も一昨日の正午頃に稽古をしまつて午飯を喫て居なさる處を御用〳〵と云つて植木業が急に十手と捕縄とを持つて捉まへに懸つたのを傍にあつた刀を曳抜 斫まくつて到頭庭の松から高塀を飛越へて何處へか迯て踪跡が知ない處からお梅が知つてゐる様に嫌疑が懸つて別莊に居るのを昨夕拘引て行つたのですがどうしたもの

か相談する人が無くつて困つて居る處です……どうか好知恵を貸して下さい七五郎さん……

と云ふさへ老の涙もろさに鼻もつまりしおろ〳〵聲七五郎は腕を拱きゅーと思案にくれ居たるが嗚呼後れたり手後れたり畢竟お梅は松島四郎が欺か夫かあらぬかと探り索る其爲に彼奴に肌身を委させしにて既に自白を爲したる上は何時迄別莊に置く可きか直ちに京師へ伴て一應菊枝の許に身を匿伏せ置んものと注意はしたるなれど然ありては松島四郎が事の發覺せしと知りて遁亡せんも豫知難しと故意依然に爲し置しが遂にお梅は綵絨の中に在る身となりたるは慇然の事してけり恁四郎が失踪すと知りなば徒らにお梅を別莊に在らしめて無慘〳〵と囹圄に繋せまじきをと獨り後悔なし居たり媼は夫を知らねば

老 七五郎さん……思案許りして居ても果しが無いお梅が牢から出る工夫して下さい……松島四郎の踪跡さへ知れたらお梅は皈るでせう……七五郎さん……你さんは四郎が行つて居る先方を知らぬか……知つてなさるなら云つて下さい……早う知らして下さい……

と切迫るを七五郎は宥めて

七 僕も松島の踪跡が知れ無いでは千辛万苦も水の泡

老 エー你さんも松島の踪跡が知れ無いでとは……夫はどうして

第二十六齣

當時の追剝の本場とも名所とも云ひ做す伏見の竹田街道の但ある藪蔭に摺火打で煙草を燻らし居る三人は彼の河内龜と堺徳と伊之助なり

龜 モー何時だらう

徳 サー亥刻強か子刻弱だらうよ

伊 爾だねー……此淋しい工合では

龜 亦今晩も素歸りか

徳 正可に爾でもあるまい……宵の稼業が出來無いなら寅刻強迄待つて居たら一番船上りがあるだらう

伊 贔屓の一番船乗りは小遣錢より持つて居ないが大坂から來た方は大体は金子を持つて居るものだ殊更正月前は……

龜 モー〳〵愚ブマの際は多取よりは少取だ小遣取に衣服だけでも好いとしてやつ付け様ねー

徳 到底先般の奮門前の一件があるから長く京坂の地には居られねー

伊 居られねへつてどうする……江戸へ行か

龜 方角も充分知らねへ江戸迄行ぞともモー熱氣も醒て居るだらうから己輩の在所へ來るが好い……何か稼業もあるだらう

徳 龜大兄だつて己輩だつて故郷へ皈れや大威張だ畢竟博奕で逃亡つたのだゲレ出したのは大阪巳來だ……ねへ兄弟……

伊 己等は倘々雛鶏だから底へよろしくだ……

龜 當街道も大分續いて働いて居るものだから隨分評判になつて居ると見へる……だから好客が通行無いのだらう

徳 爾かも知れねへ……猫の子一匹來ないは……此二三日は

伊 油の小路はどうだらう

龜 イーや不可〳〵

徳 大津街道へでも行つたらどうだ……氣を轉て

伊 夫よりは三十石の船賃だけでも稼業で河内か和泉かの在所廻りが好からう奮門前巳來は京都では寐覺がよく無いから

龜 ぢやー今晩限としやう

徳 所が違つたらまんも直るだらうよ

伊 扨つたらふ名殘狂言に今晩は一番やんやと花々しくやるのだ……やー提灯が見へるせ

龜 エー何處に……

徳 ムー成程三人伴だが商人らしい

伊 西南向で來るのだから到底どつとはしないだらうが……

猪 藪蔭へ這入て一人〳〵出るのだ……好いか
合点だ〳〵
伊 一番は己輩がするぜ……
と互に謀し合せて潜伏すれば程無く京都の方より出て来るは三人仝伴の旅人
甲 一番船の間に遭ふ様にと宿屋へ云つて置たら滅法早く起したがどうしても東が白まないが時を間違つたのらしい
乙 如何にも爾です……月の出處を見ると子刻になるかならぬでせう
丙 困つた事だが休息む事にもいかぬ詮方が無い……サッサと伏見迄行つて船宿を頼んで一寝入りさして貰う……
と話しながら来る鼻の前へヌーと出たは頬冠りに面を匿し居る伊之助なり突然に腰の一刀を引抜て
伊 コー三人……口上は節季師走に云つて居る暇が無い……キリ〳〵金子を出しさらせ……

と云ふにビリ〳〵慄ひ
甲 カ、金子はコ、小遣ひだけより……
乙 ソ、夫でもヨ、宜しいなら
丙 ダ、出します〳〵……
と三人ともに懐中に手を入れてモヂ〳〵して居るに伊之助は氣を苛つて
伊 エ、早く出さないか……
と云ふを聞より河内縞も堺徳も仝しく一刀抜連て躍り出で
徳 グツ〳〵して居ると打殺すぞ……
猪 一命が惜くば衣類悉皆褫いで行くが好い……
との大音聲に三人の旅人は吃驚仰天赤裸になつて一命許りはお助け下さい……と云ふかと思へば爾は云わぬ三人一齊に懐中より十手捕縄を取出し
御用〳〵……
と聲を懸け捉らへんと犇めきたり三個の悪漢は失敗たり猪は捕亡吏であつたかと恐の

中に驚けども怯れを見せじと斬て懸れば捕亡吏三個は十手にて白刃を打落さんとエイ／＼聲して打て懸る元來該三個は京都町奉行の部下にありて長吏と稱する輩にて殊に老練の名を博せし源造平吉藤三郎なれば難無く白刃を打落し遂に繩にて縛めたり三個の兇漢を傍の松の幹に縛り置て

源　コー汝輩は今更云ふ事もあるまいから問もせないが該三人が旅人に扮つて態して來たのは汝輩の樣な木葉賊を縛に來たのとは違つて……

平　美濃の大垣に久しく居つて劍道鎗術の指南をして居つた松島四郎と稱ふ者を探索の爲めだ……

藤　大垣藩から町奉行へ依賴になつたで夫で此邊にはつて居るのだが……

源　何でも大垣を遁亡際は金子を携帶ては居ないから必定追剝でもするのだらうと鑒定て夫れで……

平　つりに歩行て居るのだ……

藤　万一知つて居るなら所在を云つたらそれを褒美に赦してやるから……

と皆迄云はぬに後なる藪の中より晃く刀エッと懸たる聲と諸共藤三郎の首は地上に飛たり是はと驚く源造平吉身構へする間もあらばこそ藪より出たる一個の曲者源造の肩先バラリスンと大袈裟に斬下て返す刀に平吉の腰骨發矢と斬るよと見しが身体は胴より二つになつてウンと云わで死してんけり彼曲者は莞爾と笑つて除々平と血刃を拭ひ傍の松に縛められし河内饂堺德伊之助の縛を解きやれば三個は夢かと許り手を合して伏拜しが伊之助は不圖該男の顏を見て

伊　ヤー卿は松島樣……

松　シー

第二十七齣

何處はあれど遊廓の正月松竹飾り飾注飾り菓子の掛鯛綿帽花伊達に競争ふ高須の里御用心／＼と髑髏のくだらぬ年玉を擔ぎ込む惡洒落の一休禪師は無けれど「しに來る人の落ざらめやわ」と詠せし地獄も恐ろしと云ふに足らぬと誇るべき全盛の名妓八重咲あり曾呂利新左衛門の迹を襲ふ幇間社流無けれど野晒悟助も三舍を避る俠客あ

り有とするは誰ぞ是は之れ以前は當所(泉州堺)寺地町に道場を開きて鎗劍二道の師範と仰がれし岡本鎌治其人にして昨安政六年の十二月より再び當地に皈り來りて甲斐の町に鎗劍の練習場を營みて開業せしが目下は獨身の氣散じさと但しは他に存慮あるか毎日毎夜に遊廓に出入りし喧嘩の仲裁破落的の强迫制止弱きを扶助け强きを挫折き義は泰山より重く命は塵埃より輕しと男を磨く俠客風俗に子分子方と部下に属し鎌治をして親分視する若輩の數十名も出來しより人は稱して不二親方と……之は甲斐の町に在って甲斐の町を離れ一と云っても二無しと彼の富嶽の駿甲相に跨がると雖十分の六甲斐の國にあり然して甲斐の不二と云わざるに表する由閑話休題彼の不二組の鎌治親方は今宵も例の長脇差に足駄穿の懐手子分二三名引伴て入り來る萬春樓の門口見るより全樓の下女下男

オー親方

オ〜先生宅の旦那か卿のお入を最前から大待兼……

と異口同音にくく云ひ立れば鎌治は頤でムーと承知し子分は上り口に殘し置き主人の居室に打ち通れば萬春樓の榮次郎は座蒲團の上へ鎌治を招じ

榮　時に先生……お入を待って居ました

岡　何ぞ急な用でも出來たのだか……例の岸和田の武士客が醉て彼是云って居るか

榮　ナーニ僕の方の事ではございませぬ譯て先生から依賴になつてある……

岡　ムー未ではアノ敵の……

榮　アヽモウ……

と微音になり

榮　一昨晩から流連して八重咲太夫が出て居る客は大和小泉の片桐の家中だと云て居ますか江戸訛に美濃か尾張の方言が少し混淆ますからどうも五畿内とは保證ませぬ加之譯ての年齢面体格外によく肖て居まするで八重咲に云ひ付け股の刀痕を撿めて見よと云って置たら愈よ左の太股に……

岡　ナニ太股に疵迄が……

栗 如何にも在ると知らせました

岡 ぢや……松島に相違は無い……だが困つたは大垣から四郎が逃てしまつたで左司馬君は菊枝殿を土山の大黒屋へ預けて江戸表へ七五郎は西國筋へ拙者は五幾內と手配して踪跡を捜索に出て居るから喚び寄るに手間日間懸れば夫迄の中をどうかして八重咲太夫に云ひ含め留置て貰ひたいが……

栗 夫する事が出來ますなら恁心配して先生に急に御目に懸りたいとは申しません

岡 とは夫はどう云ふもので……

栗 サー底でございまする八重咲太夫は去年の暮に紀州の御客人から約定金が這入つて正月上旬既に明晩迄に落籍して大坂へ同伴て御歸りなさる筈でございますが今以て御沙汰が無いのでどうなるかと心配最中御宅は湯淺で一二を爭ふ豪商ですから金子には御不自由はでございませんが旦那と云つても金銀は支配人の承知で無いと御隨意に出來無いのが御家風殊に奥様は御支配人のお娘公とかいふ事ですから万一故障が這入つたのではるるまいかと思つて居ります明日に殘金が參りませなんだら約定金は流失ますから爾なつたら八重咲に含ませ足留は致させませうが

岡 爾云ふ都合にいけば好が……

折節座敷に藝妓が唄ふ唱歌

「思ふ事叶わねばこそ浮世とはよう諦念た無理な事(下略)

岡 チヨツ(舌皷)緣起のよく無い歌だ……

奥の四帖半の小座敷の寢具の上に寐匍匐て莨を吸ひ居るは廓の通稱をむつと呼ぶ二十八九か三十歳とも覺しき武家風の客人枕邊に座り居るは花魁八重咲なり

八 アノーむつさん今八疊で唄つて居ます思ふ事叶わねばこそ浮世とはと云ふ歌はよく理が積でムいますねへ……一日も早く苦界を脱てと思へば思ふ程尚云ふ都合にもいかないで……アー辛氣な事でムいます……嬉しいと笑つたり悲しいと泣たり腹が立つと怒れる身になりたいと思ひますが何時爾なりますか……何九年苦界十年花衣短かい一命に長い年季アー……

と煙管を手に取りて杖に突き片手に抑へる胸の痞物思はしき其風情むつは手を伸して

袖を曳き

む　コレ八重咲……何も其様なにきな〳〵苦にせぬが好い一回小泉へ歸つて來ら落籍の金子位は持て戻るから爾なつた際には笑ふが泣ふが怒らふが你の自由……

八　エーナニ卿が妾の落籍を……

む　ムー如何にも……嬉しいか

八　イーエ妾は矢張り此の儘で置て下さいまし……

又も聞ゆる座敷の唄の結局

「申し〳〵これ申し拜みんす頼む神様

第二十八齣

春とは云へど正月の上旬餘る寒さに冴返りチラつく雪を侵しつゝ紀州街道を南から走り來る一挺の駕籠

○オイ合棒……大分雪も小歇になつた堺も其處に見へて居るから立場をせない夫の代りにチト ユル〳〵行としやう

●ムー爾だ日沒迄と仰やつたが倘未刻强だが戻りの稼業をせなくともだ……酒代は何道下さるだらうから……

○夫は云わ無くても事だ……行先が行先だ

●高須で加之も万春樓……ナー旦那……素敵滅法界竹輿に重量が有ますせ……

○大層携帶てお出ですねへ……

と云へば駕籠の裡の客人は

客　爾直く肩に應へるか……ナーニ僅七百兩未滿……二分金で……

●種々な事をお尋ね申しますが堺へ何品を買出しにお出なさい升

○其樣な事伺つてどうするのだ紹介でもして口錢を受取る目算か

客　買出しは買出しだが妙な物品だ……何だか的中て見るが好……的中たら二分やるから

●夫は豪儀だ……合棒考へろ〳〵

○爾さねへ……鉄炮ですか

客　イーヤ……
●庖丁ですか
客　イヤ……違う
○ハテ……何だろう……酒でもお仕入なさいますか
客　大違ひ〳〵
●ぢや……段通でせう
客　是も外れてる
○そんなら干鰯〳〵
客　矢張他品〳〵
●モー當がございません……兄弟どうだ
○降參〳〵どうか旦那云つて下さい
客　兜を脱だら云てやるが滅多に判つてたまるものか……
●エー婦人

○婦人とは
客　婦人と云つたら婦人だ……婦人も婦人も魁娼だ
○ヘー魁妓……
●ナニ花魁……
客　高須の八重咲と云つたら大阪の新町にでも京都の島原にでもマー無いは……
○アノー八重咲……
●八重咲を旦那が……
客　汝輩も知つて居るか……アノ八重咲を…
○ヘイ……イエ名は聞て居ます
●アノ花魁は名を知らないものはございません十里四方では……戀してお買ひなさ
つてどうなさいます
○どうなさいますと云つて抱て寝なさるのだ
●夫は知れて居るが其後は

○其後が云われるものか
●エー合點が悪い……花魁をどうなさるとお聞申すのだ
○どうなさると云つて……
容ナー判つてる……何處へ置くと置くのだらう……大阪へ圍つて置くのだ
●全体幾何でお買ひなさいました
容五百両……
○ヘー五百両……夫に七百両……
容ナーニ二百両は約定金が渡してあるから三百両やつたら假の所有だ……殘金四百両が落籍祝やら大阪に妾宅を設置へる雑費の準備だ
●何日頃に大阪へお發途ですねー明後日の朝から道明寺へ參詣して然して大阪へ行く計畫だ……
○旦那どうか……其節はお供をさせて下さい
●うまく慾ばるねへ……然し旦那……願ひます

容フン……承知だ……
○ナーコレ兄弟……朝から晩迄スー〳〵云つて慾して働いて居て酒の五合も飲して遊近には乳守のスベタの顔でも見るのが此上無しと思つて居る我等でも人間の一生は一生だ
●又旦那の様に金子の五百両もお出しなさつて花魁を落籍せて大阪へ圍つてお置なさるのも人間の一生は一生だ
○好月日の下に生れたのと悪月日の下に生れたのとは慾も違つたものかねへ
●アー其様な事を思つてると駕を舁くのが厭になるぜ
○其様な事を思わ無くても厭だが喰ないが悲しさに息杖に縋つて活計て居るのだ
●子々孫々迄駕舁抔になるものぢや無へぜ
○我等の親でも據ころせ子を駕舁にしたのだらうぜ
●何だか知らねへが駕舁はモー翌日から廢止にしやう
○旦那……合棒が急に愚痴を吐して居りますぜ……ナー旦那

○旦那は花魁さんの事を思つて夢中でお出なさるから汝輩が云つてる事抔はお耳に這入るものかねへ……ナー旦那

●旦那……

○旦那……お寢眠ですか

●お寢眠ですとお風邪を感冒ますぜ……鼾を發てお出だ

○寒い〳〵とお飲なさつた酒か効験たのだらう……徳大兄モー大丈夫だぜ

●大丈夫だと云つて婦人の一件もあるから先生へ云つてからで無へと惡いぜ

○爾たねへ……二人でも譯は無へが此樣な仕事は……だが竹田で先生が來てくれないだつたら御今頃は出牢て居ないだらうと思つて見ると此樣な稼業をして居ても恩は恩だ

●伊之公が云つてるの處は底もあり蓋もありだ夫に龜大兄を捨置て仕事をするのも氣が惡くなるとよくないから

○モー預けてある樣なもんだ今日のぱんどら餘りがはつたりに減るだけの事だ其代りたぼが付くわ

●たぼは先生が御馳走で我輩の御相伴は出來めへが詮方が無へ

○ぢや……爾と決て明後日の事としやう

●ムー……合点だ……一寸杖して急がう……

とカチンと突した息杖の端鐵が礫に中つた音に潟の裡の客人は目を覺したか

客アー……

客オイ……駕夫……何か……高須は……

と欠伸して

第二十九齣

河内の國八上郡長曾根村西尾定七の庭の離室を借受て止宿なし居るは將軍家の旗下の次男にて伊達一三俳名梅山と稱する俳諧師との觸込なれど内實は隱密と隱語せる方今なら秘密探偵當時の隱し目付なるべしとは近隣の池の端の甚次郎兵衛やら森の下のお竹未亡人輩が想像説も當らずと雖も遠からずと見へて奇々怪々なる人物が出入する

にてぞ知らる今日も朝から桑野龜造とて以前當村に在りたれど賭博犯にて所刑せられ久しく京坂に住居たる趣きなるが近頃販り來て彼の伊達一三を當家へ止宿の周施せし者なるが訪ひ來り酒酌交して密話閑談を徹ぎ處へ入り來りしは毬栗坊主の今尾伊之助と荒縞丹前に三尺帯の酒井德松との二個なり

伊 オー龜さん……お早う……

德 ヤー先生……モー始まつて居ますな……

と云へば一三は龜造に猪口を廻し

一 サー霜除だ……

龜 駈付三盃……

伊 ヤー御酌か有難い

德 コレ〳〵……酒に限る……

伊 機運が挽回つてるぜ

德 爾だとも〳〵

一 機運が挽回たとは耳寄だ

龜 朝から縁喜が好……何だ〳〵

伊 云つて好か……

德 一寸障子を開て見てくれ

一 仔細は無へ……背が藪で母屋迄は十四五間も隔つてあるから

伊 ぢや……云ひませう昨日貝塚から堺の高須迄乗せて行つた客の事て……

一 好、○○好かるか

德 好、好の段ぢや無へんです……擲にズッシリ肩が入るのは五百より以上は大丈夫携帯て居ると白眼んだから問落しに懸て開て見ると鑑定よりは二百も多分だ

龜 そいつは素敵だ……底でどうした

伊 どうと云つて明日の朝から道明寺參で大坂行だから寅刻起にして大和川の提防へ擔ぎ出すから津堂村邊で先生と兄分が待伏て居たら袋の鼠だ

一 夫は正月早々の稼業には無類大極上だ

伊 先生……一盃お買ひなさい……倘や飛切の話があります

徳 如何にも爾だ……御散財なさい……前祝ひに

[illegible] 又和泉の大鳥の福田村の際の様に前祝ひをして行つたら堺で悉皆物品を買つた迹で三人を切害し損で僅三兩……アノ傳ぢや困るせ

伊 大違ひ〳〵先生に一盃お買ひなさいと云つてるのは足駄穿て首つ丈の八重咲がお手に入ますせ……金子無しに

一 エー眞實か

[illegible] 虚言だ無へか

徳 早く云つたら悳だ……今云つたかもねへ……夫は紀州湯淺の有田屋と稱ふ醬油商で八重咲を落籍せて大坂へ伴て行く客人だ

一 ムー成程……約定金二百兩とか渡してあるとチラッと聞た

伊 だから……今日が落籍祝宴で明日は二人が駕二挺と云ふ計畫で行くのだから……

……なー好かへ

徳 モー一挺は仕立て行くから其駕に當人を乘せて我輩の方へは八重咲を乘せて行くとして……

一 ムー領承で居る……他の駕を前へやつて夫が來たら自分と亀造とが唐突に斫つて懸る……爾してる中に汝輩は八重咲を伴て薮蔭へでも駕を下して猿鏥を箝てじ゜わ゜り縛つて……迯無い樣に……

[illegible] 爾して徳伊も手傳つて駕を昇て居る奴も一緒に切害でしまつて其上で田邊か新宮へ遁走しやう

伊 悳手配りが出來たら迯しッ事無へせ

徳 失敗つてお゜た゜ま゜り゜こ゜ぼ゜し゜があるものか

一 有難てへ〳〵……此間も八重咲が苦界は厭ぞと吐すから落籍してやらう……巳が一遍小泉迄行つて來たら五百七百の金子はどうでもするからと云たら……イーエ妾は矢張り依然で置て下さいまし……と微音で云つてピ゜ン゜と゜すねて身を背け煙管を杖に頤をゑりに埋た處は厭がられてさへ可愛くて耐らないのだ夫が自分の所有

にして優しく莞爾しられたら實に命も何の其だ……

伊 先生……前祝ひの約定金に半金でも……

德 褒美の前借も洒落てるわ……

一 悪錢は身に付ぬで和歌山街道を神出鬼沒切奪盗强は武士の慣習と逐嚇して奪た金子も千五百兩許り殺した人も五六人……夫だのに相變らぬ許の苦しさ……マー〳〵明日にしてくれへ

龜 何だか負債請求が來て居る樣だ

伊 注連も明無いのにか……

總 おごとおはさんか馬鹿〳〵しい

晋 呵々々々々、〳〵

第三十齣

霜げ晃めく朝闇に大和川提防の津堂村最近の藪蔭に血刀拭ひ居るは伊達一三叉梅山と變名せる松島四郎と河内龜と通稱せし桑野龜造となり傍の竹輿に倚懸つて莨吸み居る二個は伊之助に德松なり

松 物事は思つた通りには行ないもんだね……

龜 昨日の約束ではたぼの方は此二人が舁ぐ傭夫にかもの方を擔がせる筈だから突然に傭夫が舁て居る駕の中のを斬たちたぼだとは實に惘れた

伊 何れたぼが後から乘るだらうと考へて傭夫の方を前へやつて我輩は逡巡して居たらたぼか前へ乘つたから詮方無くかもを我輩が擔ぎ出したのだ

德 すると藪へ來るか來無いにバッサリ斬つたもんだからどうするにも暇が無い……だがよく思つて見ると自分が落籍せて貰つた旦的を殺したのだから何處へどう伴て行つたつて諾と抱れて寐さうも無いから愍な事するより一思ひの方が斷念がよくて好……なー先生

松 マー爾云つたら其樣なもんだ……が惜い樣な氣がする

龜 惜い處か準備が好い婦女と見へて懐中の二百兩には駭いた

伊 アレー切害して寐らないと七百の中か三百缺てる處だつた

四 三百八十両餘と二百とだから合して五百八十……先生……邪魔が來無い間に……なー伊之

伊 爾だとも到底四個殺して居るからモー一つの家には居られ無い別れ〳〵に逃亡のだから……

と云へば四郎は星明りとホンノリ白む東を向て百両包みを折半して兩人の手に渡し

徳 サー……夫ぢや尽力賃だ……

二人は握つて見て

伊 エーモシ先生……是は幾何です

徳 五十両ぢや無へか

松 ムー爾だ……不満足か

伊 不足と云ふでも無へが……なー兄弟……

徳 サー從前の様な仕事なら當乞扶持でも謎と云ふが……

伊 二個が皆悉膳立してサー喫んなさいとしたのだから

徳 分頭割賦でも百五十未満だ……

伊 苦情無しに百両宛は慥にある

四 何程敢程と云わ無いで先生に任して置くが好せ

松 アー亀造……二人が云つてる望みの通りに遣ちまうから

亀 デモ……

松 到底資本の入ら無へ商賣だから……無くなつたら又奪る分の事だ……

と又懐中から百両投出し

松 底へ好い様に分配るが好せ

伊 適は先生だ……

徳 了解が早い……

と俯きて取らんとする伊之徳松を四郎は腰なる長劍を拔くより早くポン〳〵と肩より胸に斬下けたり刀は銘作手ば熟練グッとも云わで倒れたるを聦で亀造に指揮すれば亀造は心得て兩人の懐中より五十両宛地上に落たる百両と合して二百両取上れバ四郎は

莞爾と片頬で笑ひ

松 恁云ふ療治をするのだ無へが四人の穢夫を二個殺して二個が生て居た日には直に原因が發覺るから夫で恁してしまつたのだ……其二百兩は汝にやるから

[illegible] ムーそいつは辱けねへ……

と懐中へ入れながら

[illegible] どつこい……又ばつさりとやるのだ無へか……正月早々から切餅は結搆だが光つたさんまは眞平だ

松 爾連累へ饗應ものか……ヤー東から……

[illegible] 加之も二人だ……此死骸が四個もあつて穢が二挺もあつて見るとワー〳〵叫くと面倒だ

松 エー庖丁の序だやつ付けろ……

龜 合點だ

と再も藪蔭に身の忍ぶ間も無く來懸る二人伴は山伏と虚無僧なり

山 紀州街道から此邊は毎度〳〵追剝が出ると云ふ事だが你さんや僞聖は安心です

虚 頭陀の裡へ一杯に入れた處が米なら二升もむづかしい錢なら夫でもパラにして三貫もあるでせうが正可に米の二升や錢の三貫文位で殺しもしますまい

山 如何に安い一命でもそれではどうも死ねません

虚 盗賊するのも金子が欲しさでせう錢や米を貰つて歩行く山伏や虚無僧を殺してとうしますものか

山 ですから……恁して無用心だと云つて居る此堤防が參行けますのです……

と云ふも怖さに臆病を見せじと力む高話し思わぞ地上の血に辷りて山伏は轉び懸り

山 ヤー揚泥か……既の事で……

虚 アー危險い……何か寐て居る……

山 人だ〳〵……加之二個……

虚 彼處にも四人……穢が二挺……

山 ムー死人だ……

虚　何処に……ヤア斬られて居る……
虚　左八殺し〳〵……

と驚き大聲に喚き立るを最前より後に立ち窺ひ居たる四郎亀造覘ひ寄つて細首を拜み打に丁と切付れば何の苦も無く死したりける四郎と亀造け微語合ひ手速く山伏と虚無僧の衣類を剝き各自着換て四郎は山伏亀造け虚無僧と身を窶し堺の方へ引返し紀州を指て出で行きける

第三十一齣

齋藤左司馬は江戸表に在て松島四郎が蹤跡を捜索なせども手掛りを得ず空敷馬喰町の旅人宿に滯溜なし居ける處へ在泉州堺の岡本鎌治より正六日限赤紙貼付の信書到達せしに取るものも取敢ず開封見れば同地高須の廓万春樓へ通ひ來るむ〇つ〇と涌稱す遊客こそ松島四郎なるべしとの文言に俄に江戸表を發足して飯り來りて堺に着せしは正月廿五日なり然るに鎌治は左司馬に逢ふや否や切歯なして云へるには敵四郎け敵妓八重咲が落籍されて廓を出し日より再び來らず又八重咲は素より落籍なして伴歸りし客其他

飜昇四人も何者にか切害されて大和川の堤防に死骸あり之もむ〇つ〇と稱るものゝ所爲なりと風評したれど判然ならず其后は何地往けん更に蹤跡無しとの事に大きに遺憾と扼腕して憤はれど詮術なければ鎌治は四國路左司馬は九州路へさして劍道の修行者と稱して出往けるが月日は看護る關守なければ箭ど走りて文久三年二月下旬となりぬ岡本鎌治は伊豫の道後の温泉場の且ある旅宿に在り或日隣の座敷に滯溜爲す三四人の客は昨夜より來りて一週間も入湯する趣きなり其客の談話を襖越しに何心なく聞に松島と稱へる人の名を云ひたる樣なれば近寄りて耳を欹てゝ聽けば

〇ムー成程其松島梅山と稱つた山伏け遁れの達人だ無いか
△何でも將軍家の旗下の次男とか三男とかで大層人殺しをした凶漢だと
〇美濃の大垣では五人も殺してツイ此間イヤモー大分になるが堺の大和川の上の津堂村の堤で男女の客二人と昇夫四人を殺してそれから山臥と虚無僧とを殺した奴だと
〇何樣それぢや其山伏の衣裝を着て山伏に扮つて居たのか

△マー〳〵爾だと見へる

●アレから紀州新宮に隠れて居つて時々に紀州街道へ出て追剝をして居たと云ふ事だ……

○和泉の大鳥郡の福田村の浦芝で旅人を三個殺したのが矢張り那奴だと

△今度踪跡が判然たのは日野郡の安松村で紀州様の御飛脚[illegible]して三百両奪つたのが最初だつたと

●サー連類の醸造とか稱ふ奴が其際に池へ辷り込で逊損つたので到頭捕つたが其奴が白状したから紀州の田邊に居る事が知れて堺の御奉行から紀州様へお依頼になつて双方立會で隠れ家へ捕縛に向つたが壺池と稱つた大池へ飛込だそうなー

○如何に逊處が無いつて池へ飛込のが第一不覺だ……運の盡だ

△爾だとも……何しろ堺の御奉行の同心と手先と紀州様の捕亡吏とが池の周圍を囲繞て居るから蟻の逊る處も無いは

●デモ刀を啣へて浮び上つて切り捲つた勢ひには避易したゞないか

○夫でも運命の底だつたと見へて紀州様の捕亡吏の一人が豫て万一の際の準備に持つて居た種が島銃で二の腕を打たが的中たからモー耐らない到頭総懸りで縄を掛けてしまつたと云ふ事だ

△どうするだらうよ和歌山で所刑にするだらうか

●イヤ堺でした悪事が一番多いさうだから堺の手でどうかすると云評判だぜ

○召捕になつたのが昨年の八月だつたが紀州様の御用の御飛脚の一件があつたもんだから和歌山の牢獄へ七ヶ月も居て今度堺の奉行所へ胴丸籠で送りになつたのだからモー調査も充分出來てあらう……而見ると所刑も遠からぞあるだらうよ……

△松山も宇和島も悉皆挪は取つたから長濱へ廻つてもモー先が知れてるわ

●僕は大洲に二三軒注文を聞く處があるが是は通り流しだから仔細は無いは

○三津が濱のは爲替で送つてくれたも知れぬとすると湯治中に近在を交代〳〵に廻つて當月の末には出發が出來やう

夫迄に我輩も去るだらうなー

△元來……
●尤も……
○皈りが近くなつたら御名殘に一寸……どうだ
△酒か……
●エー酒もだが……婦人無くて何の巳れが酒哉だ
○エー惡りい語路だ……然し察しが好ね—
△ソリヤ蛇の道は蛇だわね—
●三人寄つても好分別が出無くて不可知惠だ
皆 呵々々々々々

と笑ひさゞめくを竊聽く鎌治倩は怨敵四郎こそ目下堺奉行の手にありて入牢の身の上なるか早く所刑にならざる中に左司馬を始め七五郎に告知らせ復讐の儀を願ひ出で罪人を申受て四郎の首を左司馬に討取らせ宮內先生の墓前に供し修羅の妄執を散し參らせんと雀躍なして喜悅奮勇早速數通の信書を認し飛脚に托し遞送りつゝ大垣藩への屆

方其他萬端の都合もあればと京都にて出會なす事に決して自分は三條の小橋なる某旅亭に旅寓して左司馬七五郎が到着するの日を指僂めて定めて待つめり嗚呼一日千秋の思ひとは恁る時をや云へるなるべし

第三十二齣

攝津國住吉郡住吉神社の濱邊なる松林に方一町の竹柵を囲繞して亡父の讐敵松島四郎を堺奉行の牢獄より請受て本日文久三年三月十六日を最上吉辰とトして仇討なすれ齋藤左司馬仝人妻菊枝と助太刀岡本鎌治にて達摩の七五郎或は面壁十二と渾号せし烏山隼三郎は旅中恙ありてか今以て到着せざと雖も該仇討には大垣の藩主戸田家よりも出張の吏員もあれば延期なすを得ず仍て遺憾なから助太刀の一個に連署しあれど病氣にて當日不參の趣きを屆け出たり之は今にも到達したらんには立會を倣しめんとの結搆なり既に當日も辰の上刻に垂んとする頃に奉行よりは與力某氏に細付の四郎を警固せしめ來りて衣服を與へ襠高袴を穿しめて白木綿の鉢卷玉襷をなさしめ兩刀を渡して準備をせしむ大垣藩よりは用人某出張して何くれと堺奉行への照會等ありて柵外の休息

所より喚込み設の床下に隠らしめしは敵討出願人の三名なり左司馬は白の羽二重の綿入の下に南蠻鉄の鎖帷子を着籠て淺黄縮緬の細帯を襷に掛て白木綿の鉢巻白の脚袢に白の足袋に切緒の草鞋は〆て結び目よりプツリと断捨たり帯する刀は父が遺物の備前無銘の二尺五寸許りなるを横たへたり妻菊枝は白の紋綸子に紅裏を袵せし綿入の振袖を二枚襲ね白の紋綾の帯を吉彌に結び緋縮緬の玉襷に全じ色の帯締等輕装に行粧ち髷は洗ひ髪に島田に結ひて白縮緬の裂を掛け白木綿に鉄の鎖りを縫入れし鉢巻を堅く締て面に薄化粧はしたれど故意と唇に紅粉を彩らざれど自然に朱を濺たるが如くにて却て美麗し鎌治は黒羽二重の綿入に白の袷を下襲として肌には眞綿を厚く入れし稽古服を着し白木綿の襷鉢巻して小倉の馬乗袴を踞短に股立して白柄朱鞘反無しの三尺有餘の大太刀を閂差になして扣へたり夫々式畢りて四郎は一刀抜て起てば左司馬も全じく白刃を持て立對へり菊枝は白柄の薙刀小腋に掻込み突立たり双方互ひに名乘り懸て上段下段に切結ぶ菊枝は元來婦人の身にて殊には郷士の娘とは云へど糸竹の業より他に知らぬ手弱女なれば只々薙刀持ちて左司馬の後に起ちあるのみ此際松島心中に思へるには左司馬は自分が劔道を傳へし位の輩故に恐るゝに足らざれども既に八月已來二百餘日囹圄の裡にありたる身なれば筋骨疲て臂力無く稍ともすれば受太刀になるの恐れはあれば終には彼輩の手に討れんも遺憾なれ之は菊枝を對んどなさば左司馬は必らず吾を討つの念慮よりは菊枝を助けんとなすべし其虚を覘つて斫入りなば左司馬を討ん事易かるべしと自問ひ自ら答へ然なり〳〵と自得してより菊枝を討んと付け入りて左司馬と刀を接へながらアツと一聲大喝して猿臂を伸して左司馬が後の菊枝の二の腕發矢と斬る菊枝は急所に耐り得ず薙刀カラリと投やりてアツと倒るを殺させじとあせれば左司馬が太刀筋の亂れるを得たりと松島四郎は肩先創深に斬下げたり左司馬は思わずタヂ〳〵と蹌踉く處を一打と四郎は眞向に抜揮すを左司馬討すな助太刀せよと傑合さねど町奉行と大垣藩の撿使の吏員が等しく懸る言葉の下に鎌治は長刀抜よと見へしが打込む尖き太刀風に四郎の肩先バラリズンと切拂へば左司馬は得たりと進み傍り四郎が眉間を斬込だり二箇所の深創に耐り兼四郎はドウと倒れ伏ぬ菊枝は漸やく起上り帯の間より懐劔執り出し仰向に倒れし四郎の上に乘懸りて左りの脇腹から

右の肩骨掛て刺たりける左司馬も勇みて右の肋より左の肩先へ掛て突込しが左司馬は初太刀の深手の創と心の弛みに氣後れして思わずウンと絶息せしが誰とも知らす耳の傍で

左司馬さん〳〵……

第三十三齣

齋藤左司馬は亡父の讐敵松島四郎が倒れたる傍に進み倶不戴天の父の仇思ひ知れやと怨みの一刀脇の下より刺通せしが張詰し氣の弛みるや思わず云と仰反て暫時は人事も辨へざりしに吾を呼活る聲の七五郎の隼三郎なるにぞ偖は彼も當所へ駈付しか現在敵の止息も刺さで正氣を失せしこそ吾なから不覺なりしと心付て氣を勵まし起返りて目を開けば茲なん住吉の松原ならぞ身は三條の旅亭の二階に一人宵寐の南柯の夢にて曉覺せしは七五郎なれば左司馬は總身に流るゝ盜汗を拭ひなから

左アー菊枝が老母へ敵討の暇乞に和田村へ行たいと云つたので幸ひ大垣藩へも復讐の届けをせないではならないので拙者の代理に双方兼て岡本に行つて貰つて拙者一人留守するので所爲がなさに横になつたら心臓の勞れかツイうつ〳〵眠つたが嬉しい危險い夢を見たので……

七嬉しい危險い夢とは如何樣な……

と問れて左司馬は夢の摸樣を具に七五郎へ告げ聞せば

七成程夫は奇態な夢でございます……夫に付まして左司馬樣殘念な事でございます

左エー殘念なとは氣遣しい……

七敵討は叶いませぬせ

左ナニ叶わないとは……

七松島四郎は相果ました

左ナヽ……四郎は相果しと……

七ハイ……昨朝大坂へ着まし直に蜜船でと存じまして安治川から八軒家へ參ります途中不圖道伴の立話しに今日(三月十八日)堺の並松町で逆磔があるとの事……如何云ふ罪人だと聞ますと旗下の次男で山伏だと云ふから何だか胸に的中氣にな

つて耐らないので引返して堺へ行つて見ますると成程並松町の字を北の端と稱ふ處で恰是所處が濟んだ處で十字架に上つて死で居る死首は容貌も變つて居るか紛ふべうも無い松島四郎ですから傍に在る制札を見るに江戸無宿松島梅山……三十才と有つて殺害した人數が二十個奪取つた金額が貳千〇八十三両……衣類其他の物品無しとありましたで急で八軒家へ走りましたが夜船に間に合ないので據ころせぬ彼地で一泊致しまして晝船に乗つて伏見へ着き直に走つて參りました……

と語るを聞て左司馬は數回歎息なして居たりしがツーと起つて傍なる脇差手に執り腹寛げ既に突立んとなすを見て七五郎は腕を捉らへ

十 コリヤ何をなさります

左 何をするとは……隼三郎殿の言葉とも覺へ申さぬ……我輩夫婦は素よりなれど貴殿を始め鎌治殿にも千辛万苦の艱難をさせ……既に鎌治殿の細君は非業の最期貴殿の義妹は今以て大垣の牢獄に囚人の身皆是四郎を討取つて亡父が末期の遺恨を散し申さん爲……夫に悉く相成つたらば孝貞忠義も水の泡何の面目あつて世上の人に見へ申さん……

と口惜し涙に身を慓わし足踏なして歎くにぞ七五郎も左司馬の心底推察なせど生害すべき事にあらねば種々と諫めて死を留め居る處へ菊枝鎌治も皈り來れば當夜は談合に夜を明し兎も角明日は堺に下り死体になりとも宿怨の刃を向んものと夫婦主從四人の輩は大坂へ下り翌朝より堺に趣き堺奉行に大垣藩より敵討許可の添書を奉呈して四郎の死骸お下渡しを願ひ出しに先例無ければ聞届け難しと願書は却下になりけれども掛りの與力より内意あつて定例の日限の相濟む上は四郎の死骸は取捨べければ然る以上にて如何樣とも適宜たるべし此段奉行より孝義忠貞を賞贊するの餘り屹度無く達するとの言渡しに難有くお受して引退き第七日目の夜に四郎の死骸を貰受けて五分試しに切り刻み頃來の宿怨を散しけるぞ心地好かりき次第なり四人の輩が四郎の存命中に鬱憤を散せざりしは遺憾の極にはありけれど成否は天なり豈人意を以て天を動かす得べけんや噫矣……

因に云齋藤左司馬は本件の始末を大垣藩主戸田家へ届け出しが藩主も大きに賞贊

したまひ左司馬は五十石にて召抱られ菊枝は仝人の嫡妻となり鎌治は十二石にて之も召抱となり豫て入牢中の梅女は構無しと放免れたるを娶りて後妻としたり七五郎は人殺しの犯罪はあれども被害者は悪黨にて種々犯罪の廉も判然あれば構無しとの言渡しを受たれど五人の死靈を慰めんと佛門に入り千箇寺參りに出て行きけるとぞ維時に文久三年三月下旬の事なり厥后七五郎の伜三郎は薙髪して甲州身延山の麓の庵室にあり岡本鎌治は梅の母をも自宅に引取扶助て居りしが維新廢藩の後泉州堺新在家町東四町に借宅して小間物商を營業し居りしが明治六年三月病死す仍て妻梅は頭髮を剃落して尼となつて義兄隼三郎入道明學の許に到りて目下尚両人共に精進堅固に修行を清淨し居れりと左司馬は妻菊枝が明治二年九月に流産の後逃に死去せしより心を佛門に傾け菩提の道に入り誦經三昧にのみ消光し居けるが[illegible]年五月京都に登り智恩院の塔中某寺の徒弟となつて法名を守道と稱し後に大坂府下河内の國丹南郡北宮村淨土宗念稱寺の住職となつて本年既に五十餘歳の老比丘なり

（大團圓）

版權登錄

明治廿二年五月十五日印刷
仝　年五月十七日出版

定價十五錢

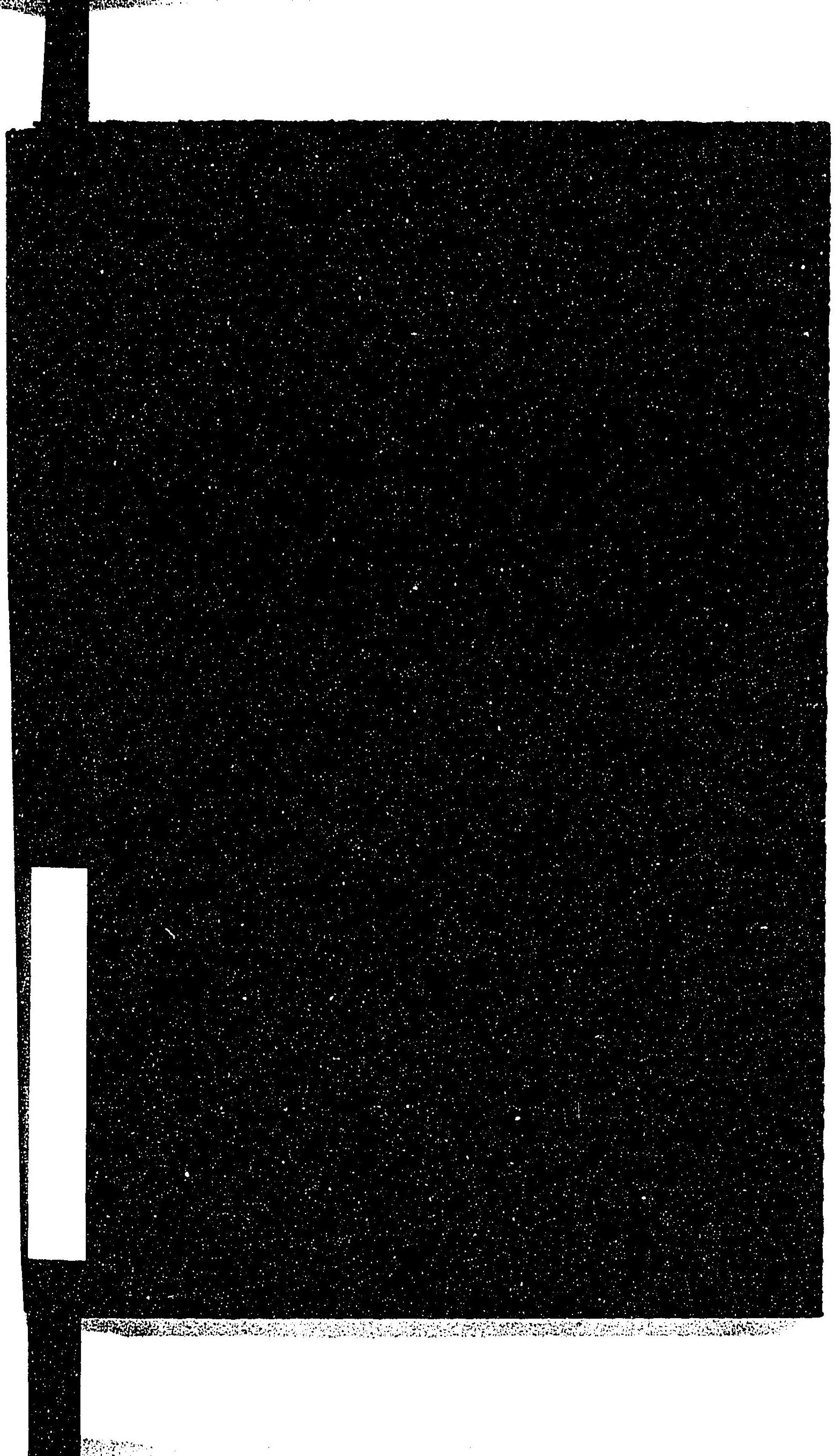
版權所有

大坂市南區末吉橋通三丁目[illegible]番屋敷
發行者　大淵濤

大阪市北區衣笠町百四十八番屋敷
著作者　奥村梃兮

大阪市東區瓦町二丁目六十五番屋敷
自由堂支店
印刷者　山上貞二郎

大坂市心齋橋北詰卅六番屋敷
發兌所　駸々堂本店



特13
355

復讐萱蓑譚

国立国会図書館

091327-000-5

特13-355

復讐萱蓑譚

大東楼　愚楽人／著

M22

DBN-2205